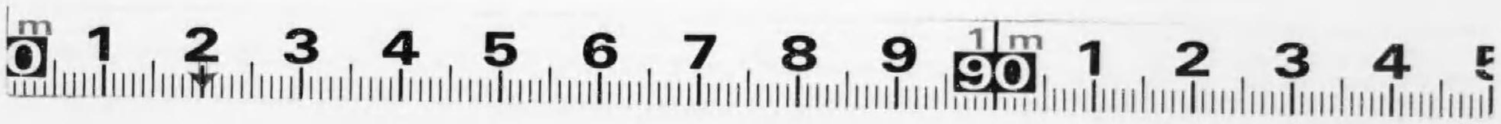
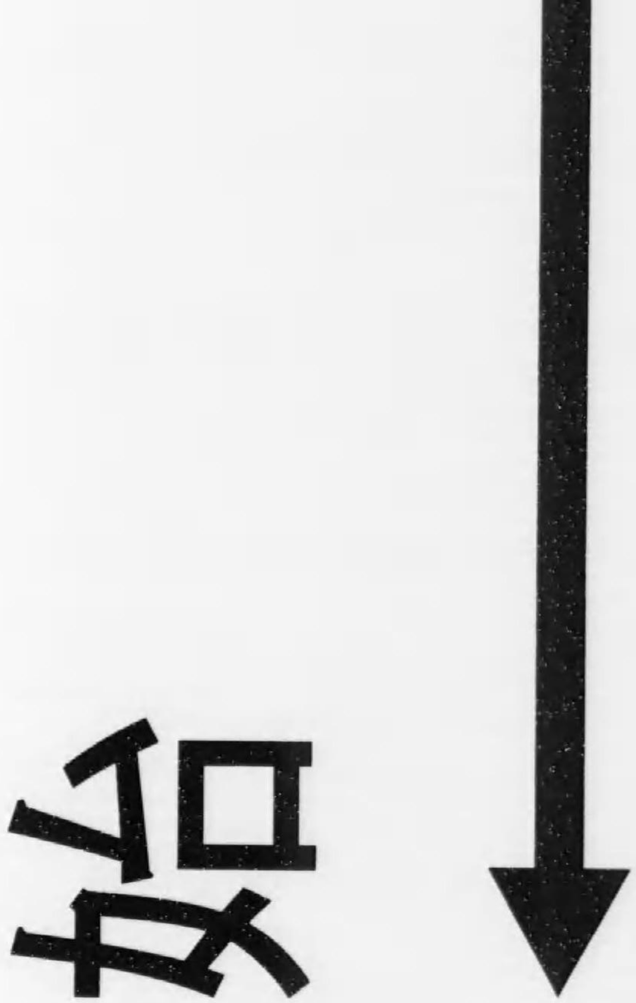
504
208





曹洞宗管長

總持寺　貫主

新井石禪禪師筆

縣掛寺 貫主 [illegible]

曹邸宗會員

修證妙義盡佛
心之堂奥樹人全
心法基 雲洞石 禪布福

504-208

凡例

一　本書は著者が各地に於て講演したるものゝ筆錄と、諸方信者に施本すべく單行せる小冊子と、各雜誌に寄稿せるものゝ中より選めるものと、是に加ふるに新に今回執筆せるものとを以てしたり。

二　本書上篇人道門には、一般修養に關する人倫道德の說を收め、中篇佛道門には、通佛敎の敎旨と、曹洞宗に於ける受戒中心の敎義とを收め、下篇悟道門には、著者の立場より見性悟道に關する禪の本領を收む。外篇二章は著者の門人が自己參禪の實驗を述べたるもの、併せ錄して學道の參考に資す。

三　本書首章は著者半生の行路を敍して以て序文に代へたるもの、末章は即ち本書の歸結を明かし、兼ねて著者平常の抱懷を披瀝せるものなり。

四　著者は遠く東都を離るゝ邊土に在ると、旦つ居常各地に拽錫しあるがため、校正

大正12.20 内交

を親らすること能はざりし。若し烏焉馬の誤植あらんとも讀者之を諒せよ。

五　本書製版まさに終らんとするに當り、素堂居士の人形塚成成る。これ亦實に信仰の餘情に出づるもの、以て世道に資するところ少なしとせず、即ちその由來を載せて卷尾を充たすこと然り。

大正拾貳年孟夏

豆州海岸土肥温泉の客舍に在て

清流道人　三村洗耳誌

人道より悟道へ

總目次

（上）人道篇　隨波逐浪

一、懸命の修行と難治の病患……一
　一　出家するまで　二　眞實の發心　三　意見書　四　懸命の修行　五　難治の病患　六　爾後の生活
二、如何に修養すべきか……一三
　一　見聞よりする智的修養　二　反省克己の修養　三　活動奮闘の修養　四　愛の力に基く修養　五　宗教的修養　六　禪の修養
三、成就德器……二三
四、己とは何ぞや……二八
　一　演若達多女　二　神か獸か　三　佛か鬼か　四　己れ無きを悟れ　五　宇宙の大生命力
五、孝道の實踐條項……三四
　一　幼少時代の孝　二　青年時代の孝　三　成人後の孝
六、友道……四三

一　友達の種類　二　友道拾則
七、丁寧第一……四八
一　自己の人格及び現在の職務を尊敬すべきこと　二　恭敬の心を以て他人に接すること　三　恭しき態度動作に出づること　四　敬愛の言語を以て語ること　五　日常の細事を丁寧にすべきこと　六　獨りを慎しむべきこと　七　宗教を信じ敬虔の念を持つべし
八、節約の根本義……五七
一　節約の定義　二　金錢物品の節約　三　時間及び自然物の節約　四　生命の節約　五　身心の節約
九、家庭心得草……六四
一　禮儀　二　金錢　三　買物　四　器物　五　被服　六　食事　七　住宅　八　雜件
拾、修身數へ歌……七四

(中) 佛道篇

圖蓋乾坤

一、精神界の生活問題……七六
一　身心兩面の生活　二　精神界の食糧　三　精神界の服裝　四　精神界の住宅
二、佛教に於ける修養の階梯……八六

一　世間に於る修養の階梯　二　六凡四聖の階級　三　五十二段の階級
三、死生大觀……九三
一　世間の死生觀は如何　二　佛教の死生觀
四、無常力の活用……一〇〇
一　自然界の利用と發明力　二　無常とは何ぞや　三　學問事業に利用せよ　四　順逆兩境の上に利用せよ　五　家庭と社交に利用せよ　六　膽力養成に利用せよ　七　宗教的入信に利用せよ
五、正しき道……一〇八
序　竪の道德と横の道德　一　正見　二　正思惟　三　正語　四　正業　五　正精進　六　正定　七正念　八　正命
六、佛法の眞實義……一三六
一　鳥の巣和尚の佛法　二　偈文の讀み方　三　長者の一子　四　家寶の遵守　五　一戒光明の生活
七、處世六法……一四九
序　彼岸は遠きに非ず　一　戒律　二　布施　三　忍辱　四　精進　五　靜慮　六　智惠
八、我等のつとめ……一八一
一　安心の三法門　二　各法門一致の大道　三　報謝の誓みは　四　利生の願行　五　佛陀の衣鉢
九、吉祥瑞……一九七

一　無限の吉禪とは？　二　目的と行爲の矛盾　三　宇宙の眞相を觀よ　四　正傳の佛法　五　人生に即せる宗教　六　境遇の反省　七　悔い改めよ　八　歸佛の信念　九　行爲の基準　十　實踐の條目
十一　我は佛の御子なり　十二　佛心の活現　十三　信仰と生活の一致

十、理想的布教師たるの要素……二三五

一　身體の健全强壯ならんを要す　二　確信あり熱誠あらん事を要す　三　品行方正心事公明を要す
四　堅忍不撓にして勤勉の人たらんを要す　五　人望家たることを要す　六　博學多聞の人たるを要す
七　哲學的記憶力を養ふを要す　八　作文の練習に從ふを要す　九　市井の雜事に注意を要す　十　常に座談に務むるを要す　十一　平生の言葉を慎しむを要す　十二　多聞多讀多演を要す　十三　補足數條

（下）悟道篇

衆流截斷

一、清新禪話……二三八

一　門松や理想に進む一里塚　二　大なる欲望　三　宗教心の萌芽　四　大宇宙心の人格化　五　釋尊最初の獅子吼　六　道とは何？　七　眞龍を愛せよ　八　禪の本領　九　日々これ好日　十　信仰の力
十一　我は佛陀と共に在り　十二　信仰は愛なり　十三　信仰は力なり　十四　宮乃佐子女史の實例
十五　雪裡一枝の梅

二、隻手の聲……二六一

三、主人公……二六七

一　目覺めよ　二　汝は誰ぞ　三　好箇の佛殿に佛なし　四　活きんとする努力　五　生存欲の向上

四、向上の一路……二七九

序　上中下三等の人　一　善を厭ひ修養に反對する人　二　善に冷淡修養に無頓着の人　三　善を勸め修養を勵むの人　四　善を樂しみ修養を悅ぶの人　五　善惡を超越し道に合致する人

五、禪と日常生活……二九九

一　茶裡飯裡みな禪　二　洗面上の禪　三　炊事上の禪　四　偏界に充てる禪　五　微に入り細に渉る禪　六　喫飯上に於る禪　七　勤勞これ禪　八　護國これ禪　九　睡眠上の禪　十　日常生活皆これ禪

六、拈評公案禪……三一七

一　無字の話　二　未生前の鼻孔　三　通身無影象　四　阿羅之論穴　五　倩女離魂　六　盲聾啞者
七　山水觀　八　諸惡莫作　九　心動　十　柏樹子　十一　打不染污　十二　百丈野狐　十三　慈明雲月　十四　婆子燒庵　十五　南泉斬猫

七、修禪の三關……三四六

八、公案の六門……三四九

一　公案の分類法　二　第一接入門　三　第二啓蒙門　四　第三摧倒門　五　第四建立門　六　第五行

展門　七　第六機用門

九、洞濟二家の病弊……三五五

十、每自作是念……三五九

外　篇　門庭施設

一、我が修養……三六五

一　青年時代まで　二　始めて禪を知る　三　郡山參禪會　四　廓然悟道

二、參禪日記……三七九

一　前記　二　接心第一日　三　第二日　四　第三日　五　第四日　六　第五日　七　第六日　八　第七日　九　後記

三、人形塚の由來……三九七

（目次了）

人道より悟道へ

清流道人　三村洗耳述

人道篇　隨波逐浪

一　懸命の修行と難治の病患

一　出家するまで

自發は元來業門の産、即ち興治九年六月廿日を以て奥州は福島縣の片田舍、曹洞宗の一寺院に於て、呱々の聲を擧げたる身である。謂ゆる蒲柳の質で醫家で云ふ腺病質に屬するもの、その今日まで生存を續け來れるは、寧ろ奇蹟であると見る人々が有る位の事である。ヂ自發は最初天下の大富豪家と成り、大いに國家を利せんと云ふ樣な、空想を抱き、十二歲で小學校を卒業するや、横濱港なる一外國品大問屋の丁稚として、

商業見習に住込だのであつたが、その勞働の烈しいのと、希望せる語學勉强の時間を得られぬのとで嫌氣が出で、一年ならずして其所を飛び出して國に歸り、學問勉强が出來るといふを樂しみに出家することに決心し、現在住職地なる長松院の先代、鷲嶽梅仙老僧の下に遂に剃髪したのは、明治廿一年四月で自分が十三歳の春である。師の膝下に侍する四五年で、其間或は夜學塾に通ひて漢英數を學び、或は通信講錄に依つて普通學を學ぶ位のもので、組織立つた勉强の出來ぬので、密かに悶々の情を起すことも屢々であつたのである。

二　眞實の發心

十六七歳にして地方の一會結制に出會常詰して、佛經祖錄の講義や提唱を聞いてからは、今までは見えなんだ別の世界が、自分の心眼に寫りて見えて來た樣な氣がするのであつた。宏大無邊なる別の世界――精神世界といふものが少し開けて來た樣な氣が仕出したのであつた。殊に十七歳の冬結制に、初めて臘八攝心會に遇つてより、自分は始めて出家したと云ふことの喜びを感じて、心からの感謝を佛祖に捧げたのである。此時の臘八攝心會の難有さは實に終生、忘れることの出來ぬ法悅である。十三歳で身の出家とするなら、十七歳は實に心の出家で有つたのである。爰に自分は參禪學道の一念止み難くて、元來無口なる性質として、その意を口頭で師に願ひ出ると云ふが出來惡いので、思案の末に一文を草して師の膝下に呈出したことであるが、其時の草稿は今に猶も文庫中に藏して置くことで、左に試みに原文のまゝ一字一句を改めずに、出して見やうと思ふのである。

三　意見書

曾テ聞ク座禪辨道ハ佛家一大事ノ因緣ニシテ苟モ佛祖ノ慈光ニ浴スル者ノ必ズ務ムベキ要道ナリ若シソレ是ヲ忘レテ徒ラニ名利ヲ貪リ安逸ニ耽ルガ如キハ既ニ佛

弟子ニ非ザルノミナラズシテ佛教ノ躰面ヲ穢ストコロノ賊子ナリ僧形ノ外道ナリト小子今幸ヒニシテ難値ノ佛法中殊ニ難遇ノ佛祖單傳ノ宗門ニ入ルコトヲ得タルハ實ニ無比ノ幸福ト云フベシ焉ンゾ寶山ニ入リテ空シク所得ナクシテ歸ルノ愚ヲナサンヤ何ゾ睡生夢死シテ外道賊子ノ汚名ヲ受ルニ忍ビンヤ因テ是ヨリ奮然起ツヲ智識ヲ四方ニ尋ネ道ヲ問ヒ心ヲ明ラメ以テ四恩ニ報ジ安心ヲ得ント欲ス蓋シ參禪問法ト功夫座禪トハ辨道上恰モ車ノ兩輪ノ如ク鳥ノ兩翼ニ似テ決シテソノ一方ヲ棄ツベキニアラザルベキカ古來ノ祖師ノ見性悟道スルコト悉ク參師ノ力ニ依ラザルハ無キガ如シ高祖大師示シテ曰ク心身ヲ決擇スルニ自ラ兩般アリ參師問法ト功夫座禪トナリ云々ト斯ヲ以テ功夫座禪ニハ固ヨリ時所ヲ擇バズ日用光中ミナコレ辨道ナルベシト雖モコレ只一方ノ見ノミ車ノ一輪鳥ノ片翼何ゾ以テ佛果ノ市城ニ達シ菩提ノ本巣ニ到ルヲ得ンヤ偏見ノ惡路ニ迷ヒ邪解ノ深窟ニ落チンノミ宜ナル哉古今東西ノ祖ミナ正師ニ參問シテ心地ヲ開明セラレシコトヤ故ニ小子モ是ヨリ一身ヲ山水雲月ニ委ネテ廣ク諸方ノ善智識ヲ訪フテ道ヲ辨ゼント欲ス若シ好因緣ノ有ルアラバ必ズヤ目的ヲ達スルヲ得ン古來ノ祖師行脚ノ初メニ當リ必ズシモ參師ヲ定メテ後ニ發足スルヲ例トセズ豫定スルモ身命ハ無常ナリ會遇ヲ期シ難シ然レドモ因緣相熟シ時節相應セバ遂ヒニ大事ヲ了畢スルヲ得ルナリ故ニ小子ハ是ヨリ遍ネク四方ニ行脚シテ正師ヲ尋ネ道ヲ訪ヒテ誓ツテ目的ヲ達センコトヲ期ス在ニ一レ佛子ノ本分ヲ全ウスルノ途ニ遮カランカ上來述ブル所ハ小子今般ノ發心ノ意見ニシテ亦終生ノ誓願ナリトス仰ギ願クハ此ノ意見ニシテ是ナリトセバ速カニ是ガ允可ヲ給ヒテ實行ニ便ナラシメンコトヲ若シ亦不是所アラバ充分ノ指示教誡ヲ垂レ玉ハンコトヲ頓首シテ謹ク白ス

這はこれ自分が十八歳の年初であつたが　師の君は是を一讀されて大いに、諒解せらるゝ處が有られた樣子で、直ちに叢林行脚に發足するを許容されたので有つた。且つ當職に日本曹洞初開乃道場たる京都府下字治町興聖寺に昇住せられたる西野石梁老師

は、我が師とは同郷同參の親交ありて、天桂回天環溪の禪を傳られたる當代の大善智識である、汝須らく與聖祖山へ拜登して、眞箇の修行事に務むるが可ならんとの事で、時は明治廿六年春四月、固き決心と大なる希望とを抱いて雲水修行の途に上つたのは、實に自分が十八歳の時で有つた。當時自分は偈を作つて師に呈す曰く、丈夫起ル志出ニ郷關一、業若不レ成誓不レ還、何厭臥薪嘗膽苦、白雲流水幾時閒。師も又和韻して自分に餞せらるゝあり即ち曰く、辭レ吾汝已出ニ郷關一、業不レ成兮誓レ不レ還、舉唱地藏親切語、勿レ忘坐臥經行閒。

四　懸命の修行

既に宿望が叶つて辨道修行の途に就くことが出來、殊に境はこれ宗祖初開之道場たり、師家は即ち宗門第一人者たる行解相應の善智識たり。自分は實に歡天喜地、涙ぐましきまでの心地せられたので有つた。無事に掛錫も許されて先づ初相見の拜謁に因み、宿志を陳べて切なる御垂誨を受けたのである。それよりの數年間は朝參暮請、寸陰分時をも惜みて功夫辨道し、ある時は山上の堂宮へ隱れて、パンや炒豆を食として、謂ゆる引込攝心に幾日かを過ごしたことも有つた。僧堂生活の常でもあるが、殊更に我が興聖寺は、今日でこそ水力電氣會社の出來たる爲に經濟も豊かに成つたものゝ、當時は名高き貧院のことゝて、日常の枯淡さは言ふばかりなく、粥は一人一食三勺の割、麥七米三の午餐、その興聖寺のゴト味噌と云へば有名なもので、米糠と醬油粕とを原料としたる品、其上日々の拽石槃土の過劇なる勞働がある。その疲れ切たる身を七尺單前に坐り込で、朝二時頃より夜は十時頃までの坐禪修行を勤むるのである。大抵の人は營養不良と過勞と睡眠不足の爲に、健康を害するを例とする。ましてや平生より病弱の持主である自分が、身躰に異狀無きを得る道理はない。風邪やら胃腸病、咽喉や扁桃尖の病氣と、二三ヶ月目には必ず御醫者の世話に成つたものである。斯る内にも修行事には全力を注いで苦修練行を續けたる末に、明治卅年冬に至りて機緣相契

は、師資の道相通じて、爰に始めて安心の地に立つ事のは廣大勤の良緣と秘かに感激
若く能はざる處である。だが同時に自分は亦もや大病に侵されたのであつた。醫者は
その病名を故言明せず只早く郷里に歸りて靜養すべき勸告するのであつた。依て自
分は涙を飲で歸國を決して、即ち告暇を願ひ出でたのである。因みに一偈を呈す曰く

一棹三字川　繁氷淵、歸來直下給舟船、隨緣對境無蹉過、十二時中參體圓。　と云
ふのであつた。時に老師も亦、慈悲耳禪人了大事歸郷、と題されて、會又法中洗
耳人、分明絲毫俗間塵、更投三字水淨心底、空手還郷趣尙新。　との偈を贈り給はれ
たるに、吾が年齢廿二才の時で有た。

因みに此の修行中、我が先輩たる岩田澧隨老兄が當時の後堂として特に自分の爲め
に骨を折つて指導下すつたことを附記して感謝する次第である。

五　難治の病患

歸國の途次、東都なる生母を省して暫らく療養を加へつ。恰かも好し郷國人の醫師に
て、鈴木萬次郎氏、同篤三郎氏兩君の共立にて神田區北神保町に、神保院なる私立病
院を經營されあるを知り、就て診察を受けし結果はソモ如何！　神保院にては自分の
爲に精細に親切に診察を遂げられし末に、最後の診斷の結果をば覆藏することを無しに
宣告して曰ふ、正にこれ第二期の肺結核である、此のまゝに過せば先づ以て一二ケ年
の生命であるとの宣告で有つた。此の前後よりして自分は、時々血痰は出る寢汗は出
る、形容枯瘦して躰重は實に拾壹貫匁を降つたのであつた。ア、肺結核！　世人は當
時その名を聞くだに身ぶるひを覺ゆる程に、恐れ厭ふ所の必死の病患と見なしたので
有つた。若しも自分が生死問題に對する何等の覺悟する所もなき、昔時の自分で有つ
たならば、此の死の宣告とも云ふべき醫師の診斷を聞かば、正に意氣消沈して自ら死
期に突進したことで有つたと思ふ。然れ共ア、幸ひなる哉、自分は已でに當時の面目
では無い。生死岸頭に立ちて些さか、自由の分を獲得して來たのである。死の宣告を

受けたに均しき此の場合に臨みても、自分は身心内外に於て些の驚異をも來たさなんだのであつた。時に院長鈴木國手は大いに自分の境遇に同情されて、云はるゝ樣。最近獨逸のコッポ氏に依て發明されたる、肺結核に對する唯一の療法、ツベルクリン注射法といふが出來て、現に北里病院や我が神保院に於ても採用して、多數の患者に施術して好結果を奏しつゝ有るが、此の療法に依れば第一期第二期の患者なれば、大抵は治癒する見込あるものながら、何分六ヶ年亦は一ヶ月間の持續加療を要するのと、その藥液の價格が高いので、一般庶民療法とするには、今の處が困難なのである。然し別人ならぬ師の如き、苟くも社會教化の任務を以て立ち、その生存が些少にても天下國家の爲めに意義あるものとせば、謂ゆる醫は仁術と稱するもの、本院は無料を以て師が治療を引受るで有らうとの、實に望外の好意の下に、神保院鈴木國手の施術施療を受くることゝ成り、生母の宅に滯留しつゝ通院養療すること八ヶ月、さしもに氣息奄々として旦夕をも計られざりし容躰も、注射療法の結果は、奏功顯著にして日に〳〵快癒し、躰重は增加し、其他一般症狀も消散して、曾つて無きの健康躰に復せるは、寧ろ一大奇蹟として、知れる限りの人々をば驚かしたことで有つたのである。

六　爾後の生活

間も無く自分は老いたる生母を引取り孝養せねば成らぬ事情が到來したので、遂ひに田村郡の山間僻地なる、小一貧院に住職することに成つたのは、廿四歳の春で有つた。數年間の田園生活は實に自分に取つて、好箇研學參究の道場で有つた。生母に留守を托して東馳西走の講演布敎に乘り出したのも此時からで有つた。其の中に生母は六十七歳で終焉を見た後は、一身何等の係累も無き、眞に天上天下唯一人者の單純生活に入つたことで有るが、我が身は縱令全快したとは云へ、彼の如き重病に掛つたもの決して普通人並の身躰では無いといふ考は、居常念頭を離れたことが無く、爲めに身命無常といふ實感は痛切なるものが有つた。爲めに幾度か幾人かの口よりして、連り

に妻帯を勧めらるゝと雖も風馬牛と聞き流して過し來る、約廿五六年間の今日に及んだことである。日常が衆僧と共に起居生活を爲す場合は、謂ゆる一種の社會的制裁といふものが働き、自然に品行を正して往けるものでは有るが、單身自由の利く田園生活を續けて居て、然も猶ほ壯年血氣の身に於て、大過無くして操行を持すると云ふは、是は餘程の困難なること、むしろ不可能の事とも言へやう。然して自分は自身の不健康躰といふことに就て、佛天に向つて感謝して止む能はぬものである。此の不健康躰を以てして、猶も或は教壇に立ち或は禪牀上に趺坐して、相應の任務を盡くし、今から廿年以前には、幻燈器を擔つては、五里十里の路を跋渉して布教し、最近年には年度の講演回數、三百席四百席に達せるも珍らしくは無い。其間何の悲觀なく何の貪著なく、大安樂の精神生活を持續して今日まで經來つたこと、そも〳〵何物の力であるか、斯は生きた參考品として、世に呈露する次第である。

二　如何に修養すべきか

人は誰しも自己の境遇や良心に就て、不滿足を感じ缺點を覺らぬものは無い。不滿を感じ缺點を覺ると同時に、成るべく不滿や缺點を除いて、より善き自分に成り度いといふ希望が起るのである。修養といふ途が此處から開けて往くのである。然しながら各人各別に、自分の境遇や性向や機會が違ふに連れて、その修養の方途が一樣で無い。今者、道人は有らゆる修養の方法を研究し、左の六通りに分類して諸人面前に呈供する。諸人は乞ふ各自その適する處の途を撰みて、自己人格の完成を計られたいものである。

一　見聞よりする智的修養

古來聖賢の遺されたる、人倫道德の教訓をば、或ば典籍の上に就て講究し、或ば他の

講義演說によりて聽き取りて、古鏡照心の方法となし、或は東西の倫理學を比較研究し、道義に對する智識を豊かにし、理性の眼を明らかにすることに由りて、漸々修養を進めるか、其他また或る專門的なる科學や哲學を專心研究するの餘り他に何等野心なく亦餘暇も無く、自然に人格が高く成つて往くが如きば、此の智的修養法に屬するものである。希臘の哲人ソークラテスは若かりし時代、怒り易き性質の人であつたが、後に自己の研學に沒頭してよりは總べての世事に無貪着の人と成つた。彼の妻女は成つて居ない粗野な、性質で、時々良人を困らすことが多かつた。或時例の妻女が、何事かに激することや有りけん、良人の書齋に飛び込み來り、連りに怒聲罵聲を浴せ掛くれど、ソークラテスは更に取り合ふ所なく、書籍に眼を着けて居た。彼女は不平不滿の餘り、机下に在りしバケツを取り上ぐるや否や、ザブリと机上に水を打ち掛けたことで有つた。時にソークラテスは徐かに窓外を打ち見やりて扨て獨語する樣、ハア雷鳴の跡には夕立が降るものだナ。

二　反省克己の修養

墮落沈淪の底に達し、世にも人にも見捨られたる身の上も、或る機會に遭遇して、俄然と眼を醒まし忽然と我に歸り、從來の非行を悔い、懺悔の汗を流し悔恨の涙にむせび、是までの缺點や過失を矯め直すべく、己れに克つの大勇氣を起し、酒で失敗せし者が禁酒を斷行し、怠惰に流れし者が勤勞の人と成ると云ふが如き、是が第二の修養法である。人誰か先天的に、惡を喜び墮落を好み、他人から惡み嫌はるゝを欲するものぞ。多くは境遇と機會との關係から、最初の一歩が後の百歩の淪落を來したのである。吾人は反省以て境遇を改善し、克己以て惡機會から遠離するの心得が大切である。昔時支那の上代に、周諸と云ふ獰猛なる惡漢が有つた。時の天子は是を嘆きて、朕の意の儘に成らぬもの三あり、南山の虎と渭水の龍と彼の周諸とで、共に國人を惱ますものであると。周諸は是を傳聞して、我は人間として虎や龍と同一視せらるゝは殘念

なりと、愛に心機一轉して非行を改め、且つ自ら進んで、彼の南山の猛虎を擊ち取り、渭水の猰貐を退治し、一擧にして國の三憂を除いたとのことである。是等は反省克己の上乘なるものと云ふべきである。

三　活動奮鬪の修養

一身一家の私的事業であれ、又は國家社會の爲にする公的事業であれ、或は學術研究、發明發見、何なりとも自己の好む處の仕事、志す處の事業に向つて、活動し奮鬪して一意專念、全く餘念なく毫も餘暇なく、事業そのものに沒頭するの極、罪惡を犯すの餘地もなく、誘惑に引かゝる機會もなく、善き意味に於ける無我夢中に成つて日を過どす者は、是亦一種の修養法である。小人閑居して不善を作すといふ俚言もある。多忙は人間第一の藥である。働くことは人生最勝の幸福である。徒食はこれ罪惡の卵子であり、安逸は即ち墮落の搖籃であることを知らねば成らぬ。彼の秋田縣十和田湖の

養魚事業に成功せし、和井内貞行氏が、明治十四年以來廿年間の苦心經營、家產を投盡し精力を勵まし、遂ひに年額數萬圓の利益を見るに至るまでの奮鬪の生涯の如き、亦は彼のクリミヤの天使と稱された、ナイチンゲール孃が、その一生を看護事業に捧げて、今日萬國赤十字社博愛事業の基を開きしが如きは、何れも此の第三の修養法に屬するものである。

四、愛の力に基く修養

人間の意志を左右するものは、その理智の力に依るよりも、情の力に依るものを多しとする。情の最も美はしきものは即ち愛である。世には獨身時代には、隨分と放蕩に身を持ちくづせる無賴のものでも、一朝もし意中の愛妻を娶るに於ては、心機一轉して、別人の如くに健實なる行狀の人と化するの實例は、敢て珍らしきことでは無い。又親子の愛情や兄弟姉妹の愛情が、心中の琴線に觸れて鬼の目にも涙の譬へで、本然

の善心に立歸るも、間々見るの實例である。更らに亦、世にも憐れな孤兒や孤獨、癈疾、不具者の、賴り少く助け稀なる薄幸の人々を見、罪に苦しみ迷ひに泣ける人々に健ふては、同情の涙せきあひず、博愛仁慈の手を垂れて、献身犧牲の尊き生涯を送るの類は、即ちこの第四の愛の修養に當るものである。彼の孔子の弟子閔損が、其の繼母が實子二人を偏愛して、繼子閔損をば虐待し、寒中に實子に温かき衣服を着せ、閔損には綿のかはりとして蘆の尾花を入れたる粗衣を與へたるを、斯くと知りたる父は、大いに怒りて彼女を離別せんと爲た。時に閔損は泣いて是を止めて且つ曰ふ、母在まさば一子寒きのみ、若し母在まさずば三子共に單ならんと。此の閔損の母を想ひ弟妹を思ふの、愛に充ちたる至情の一言に、左しもの繼母も己が非を悔いて、泣いて夫に謝し伏して閔損に謝し、茲後は一家和合し、樂しき家庭と化したと云ふが如き、其の前段の實例である。亦彼の福田會育兒院の基を開ける爪生岩子女史の生涯や、熊本回春病院を創立して、幾多不幸なる癩病者を救護せる、リデル孃の如きは、これ後段の實例である。人は至情に動き、至誠は人を動かす。尊きは至醇の愛情力である。

五　宗教的修養

宗教的修養法を、簡短に述べ盡すことは六ケ敷きことであるが、罪深く惱み多く、他の色々の修養法も何等、自分の力とは成らぬと知つた場合、只大慈悲の如來の本願力にすがり、お救ひに預ることの嬉しさを、しみ〴〵と悅びつ、其日〳〵に營む行爲の上に、佛恩報謝の眞心が溢れる有樣、或は亦、自己の罪障を自覺すると共に、佛も元は凡夫なり、我等も佛性を具有する身ぞとの信念を以て、先佛曩祖の指導のまゝに、淨信を以て罪障を懺悔し、至心を以て三寶に歸依し、佛戒を受けて佛位相續の佛子となり、扨て其上の日常は、佛願に準じての衆生濟度、佛恩に報ずる感謝の營みと心得て、信仰の上に統一されたる生活を爲す、これ此の第五の修養法である。彼の常不輕菩薩が、總べての遇ふ人々を禮拜して、如等〳〵皆當作佛、と云ふて過ぎたといふが

如き、面白いことである。總べての人をば佛として尊重するは、同時に自分をも尊重することである。承陽大師の謂ゆる、此の行持あらん身心、自らも愛すべし自らも敬ふべし、たとひ自らの所作なりとも、しづかに隨喜すべきなりと。お示しの如き、信仰に飽足せる修養狀態といふべきものである。

六　禪の修養

禪の修養とは、結局前五者の長處に渉りて、然もその眞髓を得るの修養法である。其の第一の方面に就て云へば、或は經卷に從ひ、或は智識に從がつて、一句の下に古佛の心を證し、一言の下に祖師の髓を得て、自主的修養の根抵を造り、或は溪聲雨聲の演說を心に聽き取りて、天地の眞理を明らめ、或は春花秋月の經典を讀破して、宇宙の玄奧を悟るもの、是を智的修養の眞髓となす。第二の方面に就て云へば、參禪修行は其の實際に當つてや、克己忍耐、或は飢寒を忍び、睡眠疲勞に耐へ、嗜好を慎しみ女色に遠ざかり、孤獨寂寞を意とせず、能く十年廿年の修練を相續するが如き、中には指を切り臂を斷ち盲と成り跛と成る者も出づる等、世間何物の克己も及ぶ能はざるもの有り。

第三の方面に就て云へば、禪の修行が、一見して超世脫俗の隱遁的、消極的に見ゆるものは、見性悟道までの修行の道程方便にて、一度その自行の確立するや、向下却來の世間門に出で、機に應じ根に應じて、隨波逐浪、活手段を弄して、よく灰頭土面、凡聖一等に接するの活動こそ痛快なれ。四弘誓願といふ大理想を振りかざしての大奮鬪これ、禪者の生涯である。

第四の方面に就て云へば、禪と愛とは恰かも正反對の對象たるが如き觀あらんも、禪と愛と豈また交涉なきを得んや。只それ禪より見たる愛や、その對象は無限にして純粹、純潔にして熱烈、『本來の面目孃の立姿、一目みるより戀とこそなれ』これ禪の戀である。『寢ても起きても立ても居ても、歩む間も主のこと』これ禪の愛情である。『暫

時も在らざれば死人に如同す」と吾等の愛や斯の如く熱烈、更にまた、法施誘導の利他的愛念や、切なるもの有りて存す。道念と云ひ願心と云ふもの、これ禪的受情の換名である。この絶待愛の前には、一切の相待愛を犧牲として悔なきもの、これ吾等が本領なり。

第五の方面に就て云へば、禪の宗教は、三祖大師の所謂、信心不二、不二信心なり。その本尊は三身に非ず、一神に非ず汎神に非ず、自力他力の宗旨に非ず、難行に非ず、易行に非ず、大小乘の部分的宗派に非ず、たゞ證して知り信じて安きものあるなり。強ひて名けば、絶學無爲天眞佛と號し、虛玄の大道、無著の眞宗と稱せんもの乎。乞ふ十方の智者みなこの宗に入れよかし。

以上の如く如何に修養すべきかとの問題に對し、道人は六通りの方法を提案したのである。想ふにそれ人根に利鈍あり、各人みな趣味性情を異にす、宜しくその適する處の方法を撰みて、自己の修養に勤め、人格の向上に志す可きである。敢て勸む。

三　成就德器

（福島縣立平中學校講堂講話速記）

從來我が宗教家は、多く年寄の人々にのみ近づいて、血氣ある青年諸士には比較的、接近しないやうな傾向がありました。從がつて從來の宗教は、老人の宗教といふ樣な批評が有つた程です。併し今や時代が改まると共に、血氣盛んな青年諸士が、進んで宗教に近寄る樣に成りました。殊に私は、從來何處へ往きましても、何れかと云へば青年の方に緣が多いことでして、今回は當平町に、修道會といふ禪の會の、發會式に臨める因み、圖らず此に諸君と共に、道を講究するを得たるを、悅びとするもので有ります。

突然のことで有りますので、別の思ひ付も無かつたのですが、此處の講堂に、成就德器といふ額面が掛けられてありますから、取敢ずこれを演題として、一場の御話を致さうと思ひます。

諸君、凡そ個人の上に就て言ふも、又國民の上から云ふても、各々自分の立脚地を省みて、大に自覺せるものは、必ず向上し、然らざるものは即ち、時代の落伍者と成るを免れぬので有ります。御隣りの支那の如きは果して何の狀でありませう。個人も亦よく自分の立脚地を省みて、自己に對する人格的の自覺、及び信念が無かりせば、如何に勉强して智識を積みても、將來の樂觀は期されません。自己の人格を覺り、その實現に勉むることは、即ち德器の成就であります。字書には德とは得なりとありまして、吾人が道を守り道を行ひ行く上に於て、自然と我身に躰得し、我がものと成るのが謂ゆる德であります。故に德は是を狹義に見れば、倫理とか人道とか云ふものであるが、廣く云へば人心の三方面、智、情、意、の全体に涉りて、全人格を完成して行くもの、即ち諸君が教育を受けて居る凡べてが、德器の成就に歸するので有ります。我々は何を爲すも、其の目的がこの德の一字で無ければならぬ。商人が利殖を謀るも、商行爲そのものを以て、德を成さんがため、政治家が國政を料理するも、政治を以て國家に德を成さんが爲め、軍人として銃劍を取るも銃劍を以て、世界に平和の德を成さんがためであります。武士の武の字は、上下を分ければ、戈を止むると書するを見ても知れるで有らう。此の德器即ち道德の容器とは、御互ひの人格は最尊最貴の價値あるもので、天地に充ち宇宙に滿てる大眞理をも、取つて以て自己方寸の間に藏め得る物なるを云ふので、釋尊は是を天上天下唯我獨尊といふた。諸君の各々がみな、天上天下唯我獨尊の存在者なので、如何に微少なるものにも、佛陀の性を宿して居るといふが、人格尊重の根本信念で無ければ成らぬ。

さて何人も如上の遠大なる自覺を持つて、立派なる人になるといふ考は持たねばならぬが、併しながら我國從來の青年は、多〻英雄崇拜主義に偏した傾きがあつて、太閤、始皇、ナポレオン、の如き一種特別の人物を理想として、進むといふ弊がありはせぬかと思ふ。これ德器成就の上から見れば、徹底の覺悟でありません。千萬人中に唯一人といふ稀に見る人物を、目標として進むならば、遂に失望することがあります。其

より、御互ひは平凡の德者を望むべきである。平凡の偉人こそ最も尊むべきものである。即ち百姓は百姓で宜しい、職工は職工で宜しい、各自の境遇に應じ、ベストを盡して其の德を達成すべきである。大臣と成りてコンミッションを取つて非難されるより、村長と成つて職分を完うした方が、どれほど偉いか分らない。これ我々が平凡の偉人を、推奬する理由であります。

又これまで青年間では、目的地と現在地、理想と現實とを、兎角離れ〳〵に見る傾向がある樣で有ります。即ち目的を達するまでの間は、苦しきものであり、目指す所へ到着せぬ中は樂は無い。其迄の途中は苦しきものであると考へて居るらしい。苦學十年など云ふて、學業は苦しいものであるが、將來博士となる手段として、苦しいけれども勉めて、學問するのであると、云ふやうなことであるが、是は大なる誤つた考である。根本より改めねばならぬことゝ思ふ。先方へ往きつかなければ樂しみは無いといふ譯では無い。東京見物に往くとしても、東京へ到達せねば樂みが無いのでは無く、途中の勿來の關でも水戸の梅林でも、日光でも、行く先きざきが、皆な樂しいのであり、その日〳〵の旅行を愉快に暮して、最後に東京で樂しめるのである。人生も是と同じく、前途の樂しみだけを當てにして、現在を厭ふ樣な考へは、必ず打破せなければ成りません。

德器を成就する上に於ても是と同じく、自己の人格を尊重するの理想は、飽まで高く持つと同時に、日々の行動は、小心翼々として、功を積み德を累ね行かねばならぬ。ツマリ吾等は、眼は天の一方を看るを得るが、足は寸歩も地上を離れることが出來ぬのである。理想は遠大なるべきも、是も實現するには、一歩一歩に細心の注意を要する。然るに現代青年には此の點が缺けて居る樣に思はれる。英雄氣取で日々の行き方が粗暴であり亂雜であるのが、學生諸君の通弊の樣に見える。數人の中學生が間借りして、自炊生活をして居た、某家の室内を一見したることあり。驚くべし夜具は敷きばなしに成り、朝食の時の食器は、晩まで其まゝ机上に轉がつて有り、其の不規律さ、

その餘雜さに、實は開いた口が閉がらなかつたことで有つた。斯の如く放縱なる生活をして居る人は、將來決して成功はせぬものと私は信じます。寢具や食器を使用することすら立派に出來ぬものは、マシテ人を使ふことは出來ません。人に使はれることも出來ません。

要するに諸君は、宜しく確固たる信念を持ち、自己人格に對する根本覺悟を持ち、而して是が實踐に當つては、用意周到、細心に眞面目に、日々を樂しみながら、德器成就の大目的に向つて進むといふ考を持たれたいので有ります。

四　己とは何ぞや

一　演若達多女

己とは何物ぞ？　實にこれ千古の疑問であり、永久の謎である。總べての人が、己が利達、己が名譽、己が幸福快樂と、一生をその己が爲めに働くことであるが、肝心なその己の正體を見届けぬことに於ては、己が爲めと思ふて行つた事が、却つて己の不爲に成つて居るかも知れない。昔し印度に、演若達多と名くる美人が在つて、毎朝裝ひをこらし、容姿を整ひて鏡に面ひ、自分で自分の容色に看取れるを常とした。或朝例の通り早天に起き出で、沐浴化粧し髮を結び、さて鏡面に向つた處、何うしたことか、自分の姿が鏡に寫らぬ。彼女は大いに驚きて、昨夜何者にか自分の姿躰を盜み去られたことゝ早合點したので有つた。そこで彼女は鏡を棄てて市街に出で、私は何處へ私は何處ぞと、叫び歩いたので有つたが、その實は彼女は、鏡を裏返しにして見た爲に、自分が寫らなんだので有つたと云ふ。眞理の鏡に照らして自分の正躰を見届けるを忘れて、徒らに外に向つて求むべきでは無いのである。

二　神か獸か

我々日本人の自尊する考からは、國は神國であり、我等は天孫神祖の子孫である、我

等臣民の血管には、天照皇太神の血が傳はつて居るので有ると、斯樣に信じ來つたので有る。然る處へ西洋の進化論なる學說が傳來して、說く處を聞けば、我々人間は元來の人間では無かつたので、昔し〳〵の大昔のその先は、クラゲやアミーバの如き、生物であつたが、段々と進化して來て高等動物と成り、最後には猿と人との間の子見た樣なる動物と成つた。それが亦進化して遂に今日の人類に成つたのである。ダカラ今日でも南洋島の或る野蕃人中には、有尾の人類も居ると、色々明細なる證據をも擧げて說くことであるが、して見ると我々は一方からは神であり、亦一方からは獸で有り得る理屈であるが、肉躰が既に然りとせば、我等の心も亦、神性と獸性とを具へて居るものと考へられる。世には野獸の如き人間であるとか、獸欲とか云ふ言葉もあり、亦神樣のやうな人だと尊ばれる所の人物も有るを見ても知れる。

三　佛か魔か

更らに佛敎では何と云ふて說くかとなれば、一切衆生はみな佛性あり、衆生は一人として成佛せざる無しと說く。佛性といふ最高精神あり、その最高精神を自覺して是を顯現するに於ては、我即ち佛陀である。佛陀とは最高理想の人格者を指す。此の佛性を自覺せざる心の狀態を無明といふ。無明とは自己の眞價に暗い事を意味するので、即ち己れとは何ぞを知らぬを以て凡夫と名くる。凡夫とは、なみの人といふことである。己れを知らぬから、他の何ものかも解らぬ。自他の眞理に暗いが故に、惡むべからざるに惡み、愛すべからざるに愛し、欲すべからざるを欲し、悲しむべからざるを樂しむ、煩惱も苦悶も斯に起り、犯罪行爲も斯に發して、凡夫から急轉直下して、惡魔と成り鬼畜と化する。一要は己れの眞價に於て、明あるか明なきかに由て分るゝのである。

四　己れ無きを悟れ

己とは何ぞや

眞に己れを明らむれば、己れ無きに到り、實に自分が解れば自分無きに達するものである。全躰、己れ〳〵といつて執着して居る、その己れといふも、樣々なる原因と助緣とが和合し、それ〳〵の機會が投合し、一定の元素が相ひ抱合して、假りに出來たる姿が己であつて、其上に起り働く樣々の心の作用も、時々刻々に移り變りて、取り止めなく、流水の如く燃え上る火焰の如くで、身も心も新陳代謝の作用が、刹那〳〵に行はれて止む時が無いもの、其間に於て常一主宰の己れといふ何物も存在はせぬのである。自己既に然り他の一切亦々同じことである。竪に時間上からは無常であり、横に空間上からは無我である。そうして此の一切の時間空間を通じて、久遠に無邊際に働きつゝあるものが存する。宇宙の大生命力――佛性即ち是である、眞理即ち是である。天地の生滅も是の力に依り、社會の進化も是の力に依り、人生の發展も實に是に依る。只この佛性のみ實にして餘物は即ち眞で無い。

五　宇宙の大生命力

實にや森羅萬象を通じての上に、永恒不斷に活動しつゝ有るもの、宇宙的大生命力これを稱して法身如來と名けたのである。この生命力の作用する所、必ず眞實であり善美であり、諧調あり均整あり、公明であり至正である。これこの諸德これを報身如來と名くるのである。この大生命力に參じ、この萬德を躰驗して、自に活用し他に活動するこれ即ち應身佛である。大人物はその大に應じて活用し、小人物はその小に應じて活用するを得て、千態萬狀應用自在、農身を以て得度すべきものには、即ち農身を現じて爲に說法し、商身を以て救濟すべき者には、即ち商身を現じて爲に說法する。一佛陀の外に自なく他なく、己なく物なし。人生は佛陀の遊戲三昧場なり。社會は佛陀の集合場である。宇宙は佛陀の大生命力の活動狀態のみ。己れを究め盡し、己れ無きに至り、始めて、天地一枚の己たるを悟る。是を佛敎の己れ觀と爲すのである。

五　孝道の實踐條項

孝は百行の基とも云ひ、國民道德の大本とも云ふので、隨分よく講明され來つたことであるが、佛敎では、父母師長三寶に孝順せよ、孝順は至道の法なり、孝を名けて戒と爲すと、說かれあつて、單に父母に對するばかりで無く、師長でも三寶でも、詳しく曰はゞ、總じて長上の我に恩惠ある、世間出世間の一切に對し、善くその恩德を感じて、感謝の誠意を持ち、報恩の實を擧ぐるのを、孝と稱するので、實際に至極の大道といふもので有るが、今は暫らく世間普通の、父母に對する孝行に就て、單に抽象的說明に止まらず、如何に實踐すべきやを、條目を分けて、敷演して見んと欲するのである。

一　幼少時代の孝

少年時代の孝行としては、第一に父母の命に隨順すべしで、何故かと理由を尋ねたり反問したり猶豫したりすることは宜しく無い。若し問ひ度きことあらば、先づその命を果してから後に、徐ろに理由を尋ぬべきである。幼年時代や少年では、解らぬことも父母に於ては、充分に承知して居ての上に、命ずることであると、充分に父母を信賴して然るべきである。父母命あらば唯して立つべしで、躊躇したり猶豫したりして、シブ〳〵立つて遣るといふは、反抗すると同樣に當ることを知らねばならぬ。第二に兄弟和合して暮すべしで、一家に兄弟姉妹の打揃つて、仲善く暮すのは、丁度一本の樹木が、枝葉茂り、昌えて居るやうなもの、その兄弟が互ひに罵り合ひ、爭ひ合ふのは、嵐が來て葉と葉と擦れ合ひ、枝と枝と擊ち合ふやうなもので、父母の心には如何に不快に響くことであらう。幼少にして兄弟和合の習慣を造れば、將來には善く鄕黨の親睦を謀り、世界の平和に貢獻する如き、大人物にも成るであらう。自分の弟妹を愛して、面倒を見てやり得るもので、何うして他日、社會の爲めに働く、所の人と成り

得やうか。第三に自治の精神を養ふべしで、日々の着衣洗面より、食器の始末、學校用具の整理等、總べて自分のことは自分で仕て、他人の世話に成らぬといふ、習慣を附けることは、獨立の精神を持ち、自治の訓練をする上に、大切なる事項である。家人は成るたけ、小供の身の廻りには世話を燒き過ぎぬやう、折角芽生える自治の精神、獨立の氣象を摘み取らぬやう、注意するが肝要である。幼少時代では、六かしい箇條は不用である。只この三ケ條を守るの教養が、充分なれば夫れで足りるのである。

二　青年時代の孝

青年時代に於る孝行としては、爰に五ケ條を擧ぐる。第一は學業を勵むべしで、男子でも女子でも、中等教育より更らに進んで專門の學藝を、勉勵せねば成らぬ時代で、長男長女として家業を繼ぐものでも、次三男女として、他家に入るにしても、獨立して一家を爲すにしても、一定の目的方針を定めて、規律ある勉學をすることが大變である。あれかこれかと度々方針を更へ、父母をして、又かと思はしめることの如きは宜しく無い。別に何の働きをせずとも、充分に生活の出來る、富豪長者の一人息子と生れたものでも、否なそう云ふ人ほど、尙更に働くことを考へて、勉强せねば成らぬ。何故なれば、夫等の富は、祖先以來の苦心の結晶物で、一層多分に祖先や親の恩惠といふ、借金を負ふて居るのであるから、その恩惠の借金を返すためには、一入の努力を要することは、無資產階級の子弟に、幾層倍するものが有るわけである。二は家事家業の補佐を心掛くべしで、家庭から學校へ日々通學して居る場合にしても、亦は家庭を離れて遠く遊學して居る場合にせよ、歸つて家庭に居る時には、時間の許す限り、店の商賣なり、弟妹の世話なり、出來るだけ働いて、父母の手助をして、その勞に服することが肝要である。それに間々女の身で、學校へでも通つて居るものならそれを善いことにして、朝夕にも臺所へなどは顏も出さず、時偶ま炊事の手傳でも言付られゝば、顏をふくらして、豫習や復習を口實に、是を免れやうと擬する有るに至

つては、沙汰の限りである。三には質素節約を事とすべしで、學校用の器具であれ、服裝其他の日用品であれ、務めて質素を旨とし、節約を事として、虛榮や贅澤に渉らぬやう、注意せねばならぬ。縱令その家庭が有福であるとしても、學生は學生の分度を守らねば成らぬ。一二等列車で旅行するとか、金時計を持つとか、裝飾付の萬年筆を使ふとか、總べて不必要の所へは、金錢を投ぜぬことである。是等の學資は一々父母の汗と血の、結晶であると知らねばならぬ。四には衛生に注意し身躰を大切にすべしで、食事でも睡眠でも運動勉强、何事も適當を越さぬやう、近來は運動熱が高まつて來て、ヤレ野球ヤレマラソンと、運動に身を入れるは宜しいが、過ぎたるは及ばざるに如かずで、健康の爲にする運動が、却つて健康を損する樣ではこまる、要は自身の躰力を省みて、自躰相應の運動法を撰むべきである。勉强とても亦然りて、腦を害したり神經衰弱を來したりするやうな、無理の勉强は避くべきである。父母はその病をこれ憂ふとかや、何事も健康第一、衛生本位にして遣つて往くことが肝要である。

五には品行方正を旨とすべしで、學課が何程優等でも、如何に運動競技のチャンピオンでも、若し素行が修まらず、品性が卑しく、心事が陋劣で有つて、人の非難を受る樣のこともあらば、其人の價値は虛無に歸するであらう。世に運動家として名ある學生が、往々にして、素行が修まらず、學課の點も餘り思はしく無いと云ふが多い樣に聞ゆるのは、遺憾の事である。今後の世に立ち、成すあらんと志すものは、品行第一、人格本位でなければ、決して成功せんと云ふことを、一心に銘して居て、其上で學課にも運動にも身を入れて往くべきで有る。

三　成人後の孝

成人以後の孝行としては、七ケ條を擧げて置く。第一は生活の安全を謀るべしで、これからの世は何を措ても、先づ生活問題が先決である。自分一己のみなれば兎に角、老父母に孝養せねば成らぬ身では、多少の不平不滿が有るとしても、先づ以て安全な

る生活法を講ずべきで、運命を一擧に決するといふ樣な、冒險的生活や、他人の手によつて脅かさるゝ如き不安なる生活やは、總じて是を避ねば成らぬ。第二は家庭の平和愉樂を謀るべしで、人生の幸福は强ち、富や名聲やのそれに有るには非で、親子夫妻兄弟一家が、相寄り相助けて、平和の月日を過ごすに有るものなれば、老いて餘生の短かき父母を持てる子は、何よりも先づ夫妻相信じ合ひて、共に〳〵老父母の心を慰め、家庭内に在つて、假りにも怒りの言、罵る聲の聞えぬやう御互ひに表裏なく、隱し立することの無き、洋々たる春の海の如き生活を心掛ねばならぬ。第三には善く子弟を敎養すべしで、子を養ふて父に如かずんば家門一世にして衰ふ、との俚言もあり、兒を養はゞ須らく己れに優るべし、己れに劣るは無きに如かず、の古言もある。自分が初等敎育を受けた切りなれば、セメテ吾子には中等敎育は受けさせねば成らぬ。自分が學士で終つたなら、子弟は博士にまでと心掛ねばならぬ。斯くて段々我家も子孫もやがて、亦社會も進化向上するので、是が實に親や祖先に對する、報恩道なのである。四には自己人格の完成を謀るべしで、何人も父母より受け得たる此の身心を、何處までも磨き上ぐれば、立派な人格に仕上げることが出來るので、修養といふことは、自分で自身を敎育し行く方法である。吾々は終身かゝつて自分の修養をば務めねば成らぬ。父母から與へられし此の身心を、善い加減にして捨て置くは、不孝なことである。『白玉を光りなしとも思ふかな、みがきしで『父母の堂に在すを富と名け、父母の堂に在さゞるを貧と名く』と釋尊は經に說足らざることを忘れて』とは明治大帝の御遺訓である。五には父母の長命を祈願すべかせられてある。親の生きて居らるゝほど、幸福なるは無い。子供は亡くしても、亦出來ることもある。一度逝かれた親は、永久に得ることは出來ぬ。老いたる親を粗末にするが如きは、何たる不心得者であらう。ヤガテ亦、自分が老年の後に、粗末にされるものと知らねばならぬ。第六には若し不善なる父母なりせば導きて道に入らしむべしで、貧名愛利の妄念のみ盛んにして、何等の修養といふことも考へぬ親達や、何

等の宗教的信念なく、よい年をしても安心立命を得て居らぬ親達、かゝる父母を持てる者は、單に物質的に衣食住の孝養のみに止まらず、進んで父母を誘引して、共に共に修養の門に入り、宗教の途に向つて、父母をして高き人格者たらしむることに、努力せねば成らぬ。殊んや父母にして、人倫道義に反する行爲ありて、世人から指彈されるやうな場合には、子たるものは生命を賭しても、その父母を諫めて、改過遷善せしめねば成らぬ。これこそ眞實の大孝行と云ふべきである。何んな惡心强き者でも、その子供の可愛さには變りはない。その可愛い我が子が眞心を込め、命ちにかけて諫むるならば、愛の力で以て流石の親をも、改心せしむること、決して不可能では無いので有る。扨て最後に第七には、歿後の追孝を重んずべしで、孝行の仕たい時には親は無しの俚言もあるが、その歿き兩親達の爲めに、その生前の德を念ひ恩を忘れずに、追善の法を營み、命日忌日や祥月年回の佛事を修して亡靈を慰め、墓參や佛參を缺かさぬやう、朝夕の香華供養を怠らぬやうと、永く〳〵愛慕の念を失はぬことが、眞の孝子と稱すべきで、亦これ實に人生を美化し、社會を麗はしくする所の基である。是なきに於ては、世は只權利義務の冷やかな關係、目前の今日の事だに善ければよしといふ、淺つぽい世界に成つて仕舞ふのである。

以上、時代を三期に分ち、更らに條目を列ぬること拾有五項、以て孝行の實踐法を講じた次第で、今日の男女學生諸氏のため、その向ふべき所以の路をいさゝか說き明かしたまでゞある。

六　友　道

一　友達の種類

一口に友達といひ朋友といふが、是をその內容の上から見れば、世に三通りの朋友が有る。即ち一には社交上の友である。各自の好む所の道々で朋友となる。圍碁、詩歌、挿花等の同好者の如き、それである。二には業務上の友で、同業者間の親交、三は修

養上の友で、信仰や修養の道を同うする人々の親友を云ふ。更らに亦外延の方面に就いていへば、最も狹き關係からは、第一個人間の友で、其上は團體といふ關係、其上は國民同志、更らに廣くは四海兄弟、萬國一家といふ國際關係、以上を總じて友と見ることが出來る。其の各々の上に於て、各々の道といふものが行はれねば成らぬ。然しながらその基點は個人間の友情を厚くするに存する。依て爰に朋友の道といふに就て十ゞ條に分ちて說くことゝする。大體は佛說六方禮經の所說に基くことである。

二　友道拾則

一に過ち有るを見ば、私かに諫め曉すべしで、友の過失に氣が附た時は、知らぬ顏に見過ごしては成らぬ。人知れず注意し諫めて改めしめねば成らぬ。夢他人に向つてそれを言ひふらしては成らぬ。二に善行あるを見ば、當に隨喜賞讃すべしで、友の善行美事は我が事の如くに悅んで、是を隨喜し奬勵せねば成らぬ。反對に冷然たる態度を現はし、密かに是にケチを附ける如きは、小人の心根である。間々友が世間から賞讃さるゝを聞きては、自分が惡くでも言はれる樣な氣に成つて、心ろ平かならぬといふがあるは、氣の毒の人物である。三に若し急難災厄あるを見ば、直ちに往きて之を救ふべしで、飲むか喰ふか何か利益のある時には、直ちに往きて是に加はるが、損のゆく時や骨の折れ相な時には、知らぬ顏するやうなのは、友道では無い。『落ちぶれて袖に涙の掛る時、人の心の奧ぞ知らるゝ』で急難災厄に臨みて、人は友情の厚薄が知れるのである。四に所有の好物は、多少これを分與すべしで、一個の柿も半分づゝ分けて、喰ひ合ひ一包の卷煙草も二人で吸ひ合ふ所に、美しい友情がヒラメクのである。與へるものは幸ひであるが、與へらるゝを豫期しては成らぬ。豫期して然し得られぬ時は、不滿の念が起るであらう。五に他に向ひて友の過失を說き、密事を告げざれで、兎角に人の秘密といふものは、聞きたがるもの、言ひたがるものだが、『談るなと言ふて談れば其人が、又かたるなと談る口の端』で何時の間にやら、謂ゆる公然の秘密と

いふ事に成るもので有る。男を讃むるものは必ず女なり、女を讃むるものは必ず男なり、との俚言が西洋にあるが、吾人は務めて友人相互の秘密を守ることを心掛ねばならぬ。六に互ひに友の長所を認めて相ひ敬ふべしで、德を讃すれば、蚯蚓にも德の讃すべきあり、失を求むれば、等覺の菩薩にも、失の求むべきありと、云ふ古語がある。強ひて求めて失を撥けば、失の無いものは無いと同時に、長所美點を求むれば、亦誰にでも多少の長所とする所、美點とするところが認め得らるゝものである。その長短を互ひに補ひ合つて、交る所に朋友の誼が得らるゝのである。『兩方で連れがわるいと親父いひ』で兎角相手方の缺點のみが目に附くは、小人の常である。七に相ひ爭ふて事を競はざれで、勝負事といふものは、勝てば恨みを招くべく、負れば心の安からぬもの、つまらぬ勝負事から、親しき友の間にも牆壁が出來て、終ひに不和を來すは多くある例である。八に友の成功を見て、妬み嫉む心を起さゞれで『善きなかも近頃惡しくなりにけり、隣に癪を立てしより後』と皮肉の歌があるが、友の成功が何も自分

の失敗と因果關係があるわけでは無いものを、友が成功して大に世人から持てはやさるゝを見ては、自分の不成功を笑はるゝかの如くに、ひがみ考へて、密かに切齒するが如きは、實に憐れむべき器字の小なる人と云はねば成らぬ。九に勸めて善に向はし、誘ひて道を修めしむべしで、若しその友人が、自分から見て性質の宜しからざるあり修養の足らぬ所あるを認めたならば、誠心からして友を諫め友を誘導して、善道に赴き修養を勵む樣に仕向くるが第一の益友といふもので、人間第一最高の友誼と云ふものである。十にその友既に死せば當にその後を念ふべしで、生前一日の親交も、歿後百年の友誼を存して、その家族を慰めて力と成り、在りし昔を追想して紀念すべきである。是を要するに、朋友相ひ信ぜよとの明治大帝の御詔勅の、信の一字を分解せば、斯る實踐條目と成るもの、而して亦是を約すれば、信とは、誠實、深切、正義、の三德に歸するものと考へられるのである。

七丁寧第一

（某處看護婦學校講堂訓話）

教育勅語の、恭儉己を持すとの、その恭の字に就て敷演して見やうと思ふ。恭は傲慢に對する恭敬、不遜に對する恭順、尊大に對する恭謙、等に當る字であるが、最も解り易く言へば、丁寧といふことである。言葉の上でも動作の上でも、他人に對し亦器物に對し、總べてを丁寧にすることが、恭敬といふことに成る。今こゝに箇條を七項に分けて、說き明すことゝせん。

一　自己の人格及び現在の職務を尊敬すべきこと

誰でも最尊の人格の持主であるから、自分の人格を自分で尊んで往かねば成らぬ。譬へ現在の自分の位置なり、境遇なりが低くとも、三日相見せざれば舊時の觀を作す勿れと云ふ、古人の言葉であるから、決して現在の自分を卑めてはならぬ。自ら侮りて

而して後に人これを侮るであるから、何人に對しても、否な天地に對し佛神に對しても恥ぢざる處の高明の心事を持ちて、グット氣品を高く持つべきである。同時に亦、何職業を營むにしても、決して自分の職業を輕んずることなく、誠意と熱心とを以て事に當るべきである。不可解なことは、世の色々の職業の人々が、何れも多くは自分の職業をツマラヌものゝ如くに泣き言をいひ、同時に他の職業をば羨みつゝあることである。その他から羨まれる人が、然らば悅んで自分の職業に從事して居るかといへば、是も亦同じく、他人の職業を羨みつゝあるので、若し斯の如くんば天下に、喜ぶべく樂むべき職業といふは、一つも無いことに成る。實に馬鹿氣たことである。或處に大層猫を愛する男が有つた。自分の家の猫が虎猫であるが、何でも一等強い猫として、世間の猫仲間からも、恐れらるゝ物にしたい、それには名は實の賓といふから、強相な名前を附けてやれ、虎も強いは強いが、モット強い龍といふ名を附けた。扨又思ふに龍が如何に強くとも、一旦風雲に際會せずば、その働きを表はすことは出來ぬ

と風と名を改めたが、風は如何に強く吹き寄すとも、牆壁を以て防がば通じ難しと、更に壁と改めたが、壁が如何に丈夫でも、之を咬み破るものは鼠であり、鼠にはヤッパリ本來の猫が強いといふことに歸着したと云ふ話しがある。銘々今日現前の自分を大切にすべきである。

二　恭敬の心を以て他人に接すること

自分で自身の尊とさが解つたならば、同時に他人の尊とさが解り、自分の職業の意義あることが解れば、同時に他人の職業の神聖が解るはずである。何んな人でも人格の本質に差別なく、何んな職業でも職業の尊とさは同一である。國務大臣として國政を執るも、その大臣を乘せて馳驅する俥夫も、共に國家の一員であり、社會に無くて成らぬ仕事である。然のみならぬ、今日俥を引いて居る人も、苦學生か何かで、他日大いに立身して、國務大臣と成らぬとも限らぬと思へば、誰をか賤しみ誰をか輕んずることが出來やう。佛も元は凡夫なり、吾等も終ひには佛なりである。世間一切の治生産業も、みな實相に非ずといふこと無しの、大乘佛敎を諦信すれば、各人みな佛であり、一切みな佛行である。

三　恭しき態度動作に出ること

間々世の中の人が、心だに誠の道にかなひなば、祈らずとても神や守らん、だから敢て形式的に神佛を禮拜するに及ば無い、と云ふが、それは一寸聞けば立派相であるが、實は横着至極の言であつて、神佛に對してでも、人間に對してゞも、眞にその尊とさを知り、そのかたじけなさを感じたならば、恭敬の念が起ると共に、その感念が自然に形ちの上に現れて、或は合掌となり、或は低頭となつて、爰に儀禮といふものが生ずるのである。敬ふべきを敬ひ、愛すべきを愛し、憐むべきを憐れむ、これを稱して誠の道といふ。此の外に彼等横着者流の道といふは、一躰何を指して云ふのか聞かま

ほし。君父師長等の長上者、其他社會的に位置ある人々等に對しては、特に恭しき態度を以て向ひ謙讓の形ちを表して、心に抱ける敬意に相伴ふを要するのである。是は先方を卓上すると同時に、自己自身の品位德性を卓上することに成るのである。

四　敬愛の言語を以て語ること

凡そ思想の傳達は、必ず言葉によりて果さるる。言葉に依て其人の抱く所の、思想なり感情なりが諒解され、又其人の品性なり人格なりが窺知さるるのであるから、言葉に對する注意は最も大切なことである。宜しく目上の人には敬慕の言葉を用ひ、目下の人には愛憐の言葉を用ゆべきで、友愛親交の美德、和合親睦の良風は、偏へに愛語を以て基とするものである。內に嫉み心や僻んだ心があり憍慢の念があれば、自然その言葉に針をふくみ、毒を持つことに成る。惡罵、冷嘲、粗野、輕噪の辭を用ゆるものは、遂に十種の過害を招くことが御經中に說かれてある。夫は、一に眷屬に嫌はる、二に鄕人に憎まる、三に意外の怨みを結ぶ、四に自ら威嚴を損ず、五に常に短所を求めらる、六に謙讓の美德を失ふ、七に世に處して惱み多し、八に禍ひ生じて身を喪ふ、九に大道より遠く離る、十に惡道に沈倫すと。實に愼しむべきことである。

五　常の細事を丁寧にすべきこと

大功は細瑾を顧みずといふことを誤解して、妄りに豪傑氣取で、脚下がおろそかに成り、行動が粗野に赴くのが、現代青年の通弊であるが、汝よく小事に忠なれ、然らば天は汝に大事を托さんで、將來まさに爲す有らんと志すものは、決して日常の細事を輕視してはならぬ。法は法位に住して世間の相は常住なりとの佛說がある。彼此、高所に安ずべき樣高所に安せよ、低所に安ずべきは、低所に安せよ、高所は高平に低所は低平なりとは、承陽大師の御示しである。各々の場所に各々の物をとは、西洋の格言である。早朝起床して臥具を仕舞ふにも、立つて便所に入り、出て洗面するにも、

各々丁寧第一として、他人の迷惑に成らぬ様にすべきである。學校で試驗の答案を書いて出すにも、問題そのものだに、立派に當つて居れば、習字の試驗で無いから、書き方なんどは何うでも好いと思つて、亂雜な判讀に苦しむやうな書き方をして出したなれば、よしや問題に對する解答は、正確であるとしても、先づ以て幾點かを減せられるものと思はねば成らぬ。筆墨紙を使ふにしても、衣服や家具類を扱ふにしても、是等の因て產出さるるまでの、幾多の勞力の恩惠を感じて、粗末にせぬやう、丁寧第一と心掛ねばならぬ。戸障子の開閉でも、下司の一寸、野呂間の三寸、馬鹿の開けつ放し、では困る。承陽大師は炊事上の心得の數々を御示しの中に、取扱ふ鍋釜の頭は自分の頭だと想へよ、使ふ所の水はこれ、自己の身命であると念せよとのことである。法界平等、天地同根といふ眞理から直觀すれば、人に人格あると同じやうに、物には物格があるので、決して粗末にし、輕視せぬが肝要である。

六　獨りを慎むべきこと

敎育勅語にも、恭儉己を持し、と御示しあり。恭敬は決して人前に在る時に限るのではなく、人の見ざる所を慎しみ、人の知らざる所を丁寧にし、眞面目と莊重の氣分を持することが、恭敬の第一義である。自分の書齋内であるからとて、寢そべつて讀書し、他人が居らぬからとて、素裸體で食事するといふ如きは、慎しまねばならぬ。彼の共同便所が甚だしく穢れて居り、公衆の集會に於て、下足の間違や紛失が多い事實は、即ち人々が是の獨りを慎しむ觀念に缺けて居る結果として、互ひに大いに恥ぢて改めねばならぬことである。社會の公德といふことも、要するに此の恭敬心の發露に歸するのである。それから先に言ひもらしたが、親しき夫妻間の如きに在つても、やはり、禮讓を守らねば成らぬことで、單に愛に偏し、親しさに狎れては、却つて何時かは、その和合を破ることになるものである。銘々この獨りを慎んで往くならば、氣

車や電車の混雜の如きも、大いに緩和されることと信ずるのである。

七　宗教を信じ敬虔の念を持つべし

西郷南洲が、人を相手にせず天を相手にせよ、と云ふたが、人を相手にしたのでは、不幸も起り横着心も生ずる。人以上の何物か絶對の權威を認めて、始めて眞の恭敬心といふが保たるるのである。人以上の絶對者を信ずること無しに、何うして眞に、嚴肅、莊重、崇高、敬虔、の觀念が起り得やうか。然して此の人以上の絶對者は、即ち我が信ずる點からして、悲智圓滿の佛陀世尊である。萬德萬智を具し給ひ、一切の人を愛して是を救ひ給ふを以て念とし玉ふ所の、佛陀に歸命合掌し、此の微少なる力の亡しき自分も、大慈悲の御手に取りすがることに於て、大なる力を感得し、佛は常に我を視玉ふ、我は常に佛と共に在り、佛陀の御力に導かれて、軈て我等も亦、萬德の備はる佛陀たらんのみ。我れ一人のみに限らんや、一切の人も亦々當來の佛陀なれ、

彼も佛子なり我も佛子なり、更らに〳〵山河草木も悉く佛陀の光明ならぬなく、一器一物も皆これ佛陀淨土の調度品たらんのみと、斯の如く信得し斯の如く體得する處に於て、恭敬觀も敬虔念も始めて徹底せるものと稱するを得るのである。總じて一切の道德も修養も、最後はこの信仰に歸するで無ければ、決して完全といふことは出來ぬ。恭敬の德の如き最も然りとするのである。

八　節約の根本義

一　節約の定義

世が好景氣時代には、一連りに成金といふ語が流行したが、近來不景氣に成つたら、今度は節約といふ語が流行する。然して宣傳する處を聞くに、何うも根本に觸れる處が少ない樣である。今こゝに節約の定義を下して、恭敬心を以て金錢其他の事物に對し、總べての物を大切にして無駄にせず、有功に活用する、是を節約といふ。と道

人は言ひたいのである。或人は金錢を成るべく使用せず貯蓄するが節約であると思ひ或人は節約は物質的方面に限られたる事に思ふ樣子であるが、强ち然るもので無い。凡そ金錢なり物品なりは、皆な社會共同生活の上に、價値づけられて在るものなれば、自分一個の私心を以て、此を左右すべきでない。我が手に入るまでには、何れだけ多くの人々の苦心と勞力とが加はり來つたかを想へば、座ろに敬虔の念、感謝の念が起るものである。是を使用するには、自分の爲めを考ふると共に他人の爲めをも考へ、亦金錢なり物品なりが、活きて働くであらうか、無駄に棄たりはせぬであらうかと考へてから、自他共に有功なる使ひ方を撰むのが肝心である。

二　金錢物品の節約

金錢でも物品でも、節約の爲めの節約であつては成らぬ。今日の節約は明日大いに有益に消費するための節約であらねばならぬ。是を忘れると、得て吝嗇に陷り易いものである。彼の昔時山内一豐の妻が、最初婚嫁の時に、父より贈與されたる黃金拾枚を深く鏡底に藏して、一家が多年生計困難で有りしに係はらず、是を出して消費すること無かりしも、一朝その夫君が天下の名馬を購入して主君の爲めに勳功を奏せんと欲するを聞くや、直ちに鏡底より出し、是を夫君に呈してその名馬を買はしめ、戰功屢次の末、他日夫君をして廿四萬石の大守たらしめたが如きは、好箇の史的實例である。凡そ我等が金錢物資を消費するに、四通りの場合がある。一に自分の爲めにも他人の爲めにも成る場合、二に自分の爲めには成るが他の爲めに成らぬ場合、三に自分の爲めには成らぬが他人の爲めに成る場合、四に自分の爲めにも他人の爲めにも成らぬ場合、依て御互ひに第四の場合を避けて、成るべく第一の場合に消費する必得あるべきである。

三　時間及び自然物の節約

時間勵行といふことは、幾年かの久しき前から、識者の稱ふる處では有るが、扨これが普及力は、實に遲々たるものである。是は成るべく勵行可能の方法を講究するが肝要と思ふ。先づ集會には成るべく、數多き人々の便宜の時間を撰むこと、開會時間と共に閉會時間をも、豫め定めて通知すること、定めた時間には人が來ても來ぬでも開會閉會すること等、それから他家を訪問するには、先方の迷惑する時間をば避けること、例せば食事時間とか臥床時間の如き、亦訪問の上はイの一番に要件を切り出して要領を盡すこと、勞働時間を正確にすることも大切で、我國の職工の如き、田舍へ往かうものなら、その不規律のこと御話の外である。先づ朝に檀那場へ詰めると、御早うと云ふので先づ朝茶を飲み、次に仕事場へ詰めて、亦職人同士が煙草を喫ひ合つて雜談にふける。十時頃には御茶が出る、十一時廻れば中食に一時間餘を費やす、夏なれば二時間位の午睡が定法とある、四時頃には亦御八ツの御茶が出る、その間には度々の喫煙は言ふまでも無い。やがて電燈が點ぜられると、彼等は左樣なら亦明日として歸つて仕舞ふといふ有樣である。働きに來たのか休息に來たのか分らない。先づ是等から改めねば時間節約には成らぬ。次に時間以外の自然物、例へば水の如きものも如何に有餘ればとて、用水その度を越して無駄に使ひ棄つべきでない。他日若し水に不自由の場所へ移住したならば、大いに困ることである。電氣の如きも、譬へ終夜燈の規定の料金を拂つて居ても、夜中不用の場所は消燈して休むが賢こい仕方である。其他に地所や居室の如きも、無駄に空けて置かずに、注意すれば何れも節約の餘地ありといふものである。

四　生命の節約

人間僅か五十年、無限の天地間に介在せる僅か許りの此の生命、節約に節約を加へて、最も有益に使はねば成らぬは、吾等の義務である。が然し世に此の生命程、無駄に使ひ捨られつゝあるものは無からうと思ふ。先づ幼年時代は言はずもがな、滿廿歳まで

は學業の習得に掛り切る。廿歳にして獨立して、何なりと仕事に着手する。五十歳の定命として、其の三分一は臥て暮らす、三分一は食事や遊びや休息等に費やさるとせば、正直正味の働く時間は滿十ケ年で、三千六百五十日、時間にして、只の八萬七千六百時間のみと成る。若し一日一時間をサボルとすれば、直ちに三千六百五十時間即ち一百五十二晝夜を無駄にするに當るのである。一世に何が惜いと云ふて、是程惜いこと、勿躰無いことは無からう。殆んや亦、縱令ば眞面目に眞劍に働くと云ふても、その一部分は、一身一家の生活問題の爲であつて、社會のため人類のため眞理のために、盡す時間の如きは、一生の八萬餘時間中、幾時間あり得るか、言ふにも足らぬ程のことゝ考へられる。凡そ我等の生命を節約して、如實に働かすことに由て、佛陀の大生命も世に活躍し、眞理の大道も世に行はるゝのであれば、日々これ節約デーぞと心得て、我等の生命を浪費せぬが肝心である。

五　身心の節約

『佛にも神にも人はなるものを、など心をば仇に持つらん』終りに此の人格の節約である。是を兩面に分けて說けば、肉躰と精神、これを共に無駄使ひせず、有益に使用して、その全價値を發輝せしむることである。如何に多の人が此の肉躰を無駄に使つて居ることで有らう。暴飲大食しては、胃腸の無駄使ひをし、色欲に耽溺しては、精力の無駄使ひをし、空想妄想を恣にしては、腦力の無駄使ひをし、運動熱に驅られて躰力の無駄使ひをする等、實に考へて見れば、澤山の無駄が有る。此等を適度に節約して、健全なる肉躰の持主たるを望ましいことである。精神的方面に就て見ても、亦澤山の無駄をして居る。智識や、感情や、意志やを、適當に使ふて眞や、善や、美やを助長せしむべきであるのに、是を無駄に使ふからして、虛僞、罪惡、醜陋等の惡傳を發生せしむることに成る。世に巧妙なる手段を以て、大犯罪を爲すものに、無學無

智の者は無く、彼等はその學んで得たる智識を無駄使ひして、遂に罪人と成たまでゝある。節約の方法手段も、世に數々あることであるが、その根本義は即ち、精神人格の問題に歸するのである。須らく此の精神人格の無駄使ひを廢して、是を有用の方面に活用し、以て自を利し他を益して、經濟的生命を持續し、價値ある人生を送られたきもので有る。

九　家庭心得草

一　禮儀

一、相手の人格を認めて互ひに尊重し合ふが禮の根本である。

二、脚を曲げ物に倚り掛つて長上を視てはならぬ。

三、高聲に談論喧笑して隣室の邪魔をしてはならぬ。

四、人の前で癢きを爬き頭を擦り脚を弄り耳の穴や鼻の中を穿ぢくつてはならぬ。

五、長上の常に坐する席に坐してはならぬ。

六、人の前で口を張つて欠呟したり嘘氣して聲を作してはならぬ。

七、長上の處に居て若し作すべき勞作あらば下坐の者が先づ作す可きである。

八、人の前で爪を剪り鼻毛を脱きてならぬ楊枝を使ふには掌で口を覆ふが善い。

九、人の失錯を見て嘲り笑つてはならぬ。

十、長上の人や來客の前で目下の者を罵り呵つてはならぬ。

十一、お客が禮裝して來た時は主人も相當の禮服で迎ひねばならぬ。

十二、食事の時や就眠時には他家を訪問せぬが善い。

十三、忙しい人の所へ尋ねて往つて長坐してはならぬ。

十四、多數の人を放置して一人二人と圍碁や將棋に耽つてはならぬ。

十五、人に酒を無理强ひして飲ませてはならぬ。

十六、人が迷惑したり厭はしい不快の感じを起す動作は何事にもせず慎まねばならぬ。

十七、神殿佛堂墓地銅像等の前では不敬の態度を表はしてはならぬ。

二　金錢

一、成るべく借金の習慣を附けぬこと。
二、きまらぬ收入を當に先き使ひせぬこと。
三、一錢ばかりとて輕んせぬこと。
四、金錢は成るべく手元に置かず郵便局等に預けおくこと。
五、金錢出入帳は怠らず記入すること。
六、壹圓の收入よりも拾錢の支出に氣を附けること。
七、旅行する時は小錢を用意すること。
八、何程親しき間がらにても金錢上の事は確かに正しく受取り渡しを爲すべきこと。

三　買物

一、買物は成るだけ現金にすること。
二、價安しとて不用の品を買はぬこと。
三、價高くとも丈夫な品を求むること。
四、酒は入用のたびに買ふべきこと。
五、贈り物は先方のために成るものを注意し体裁のみを飾らぬこと。
六、買物するには直段を聞きて財布に相談すべきこと。
七、賃錢を定めずに俥や自働車に乘り廻さぬこと。

四　器物

一、總べての器物は場所を定めて置くべきこと。

二、器物の取扱ひには音を立ぬやう手輕にすべきこと。
三、洋燈や電燈をぢかに釘に掛けぬこと。
四、塵拂ひの紙の切れたる、二箒の先きの切れたるは使はぬこと。
五、マッチ、蠟燭、消壺は火氣なき處に置くべきこと。
六、桶類は水を切り置くべきこと。
七、鍋釜の炭を時々かき落すこと。
八、飯びつは永く水に浸さぬこと。
九、靴、下駄、は洗ひ磨きを怠らぬこと。
十、廣告ビラ古手紙等を無駄にせぬこと。
十一、外出の時は履物の緒をあらため見ること、
十二、火鉢の灰は毎日ふるひ且つ時々取かへること。
十三、鎌鍬其他の刃物類はサビ附かぬ樣にすること。

十四、漆器類はよく拭ひかはかして仕舞おくこと。
十五、傘は日蔭に干すべきこと。
十六、使ひ終らば何品でも元の處に仕舞ふこと。
十七、提灯の中にマッチガラを投げ込まぬこと。
十八、不用の電燈は消して休むこと。

五　被　服

一、常用服は木綿物とすること。
二、着物は脱ぎ棄て置かぬこと。
三、小供には筒袖のものを着せること。
四、袷や綿入の下には必ず木綿さらしの肌付をつけること。
五、羽織はんてんの裾を尻にしかぬこと。

六、毛織物は虫に付かれぬやう氣を附けること。
七、着類はひどく汚れぬうちに洗濯すべきこと。
八、洗濯物は永く水にひたし置かぬこと。
八、洗濯物は強く絞らぬこと。
九、冬物は入梅前に洗濯して仕舞ふこと。

六食事

一、炊事萬端には主婦が自ら手を下し、臺所を下婢や小娘に委し置かぬこと。
二、食物を調理の時には不潔な話や下品の談話を口にせぬこと。
三、調理の時には髪や顔手足をなでさすらぬこと。
四、食物に息を吹きかけぬこと、くさみや咳をせぬこと。
五、米粒飯粒を粗末にせぬこと。

六、お米お汁お菜と總べて御字を附け尊崇の語を用ゆべきこと。
七、味噌はすつて用ひ薪は割つて燃すべきこと。
八、薪物は風雨にさらさぬこと。
九、不用の時は火を消壺に入れて消すべきこと。
十、味噌や漬物類は桶の中をほじくらず上部より取出すこと。
十一、湯水を無駄に使はぬこと。
十二、ぬれ手で鹽をつまみ出さぬこと。
十三、土瓶の茶はしたみ切つておくこと。
十四、夏は醤油を煮立て置くこと。
十五、同じ材料にても調理法を工夫して味ひを添ゆること。
十六、成るべく出先にて食事を取らぬこと。
十七、飲みすぎ喰ひすぎぬ用心のこと。

十八、淨潔、輕軟、如法作を炊事の三要諦と心得ること。

七 住宅

一、屋内に通風と採光とを善くすること。
二、内外の掃除を手まめにすること。
三、押入や臺所戸棚の中は殊に掃除を怠らぬこと。
四、ブリキの屋根や樋には塗り換を時々怠らぬこと。
五、戸障子のすべりを善くすること。
六、煙筒の掃除を怠らぬこと。
七、流し尻や溝に水をためぬこと。
八、屋根や壁や戸障子共に小破の時につくろふこと。
九、臺所と便所とは成るたけ離して造ること。

十、邸内には果樹類を仕立ること。

八 雜件

一、人に親切、仕事に丁寧、萬事に正直、是を處世の三大要心として守るべきこと。
二、家内の和合、近隣の親睦を謀ること。
三、約束の時間を違へぬこと。
四、祝儀、葬祭には浮華を避けて實意を盡すこと。
五、酒食の交際は成るべく避けること。
六、無駄話に時間をつぶさぬこと。
七、手足の爪は常に切り置くこと。
八、思つて益なきことに精神を使はぬこと。
九、早起のくせを附けること。

十、仕事は一事づゝ順々に片付けること。
十一、自分で出來ることには成るべく人を使はぬこと。
十二、不平を多くならさぬこと、愚痴をこぼさぬこと。

拾　修養數へ歌

（是は道人施設の日曜學校にて少年少女に授けたる自作の歌なり）

一つとや、人々勵めよ國の爲め（この句は讀み返さずに下の句へつづけ讀む）君のため、男も女ももろともに。　忠義

二つとや、兩親樣の御恩をばあけくれに、忘れず孝行盡せかし。〈　孝行

三つとや、皆々仲よく交はれよ、爭はず、家内親類友だちも。〈　和合

四つとや、世の人互に助け合ひ、惠みあひ、慈悲心を先とせよ。〈　博愛

五つとや、いつも心を清らかに、柔かに、保つ女ぞ美人なり。〈　眞美人

六つとや、無病息災仕合せを、生む母は、働く手足の元にあり。〈　勤勞

七つとや、難儀するのも樂しむも、其の元は、自ら蒔きたる種子と知れ。〈　因果

八つとや、約束違へずいつはらず、あざむかず、眞心を一筋に。〈　正直

九つとや、心を磨き身を修め、道を知り、盡せよ世の爲め、人のため。〈　修養

十とや、富と智識と品行と、健康の、具はる人ぞ世の寶。〈　世寶

（中）佛道篇　函蓋乾坤

一　精神界の生活問題

一　身心両面の生活

現代に在て、論議の中心をなす主要題目は、何といふても生活問題の範圍を出でぬことで、生活の安定、生活の向上、生活の改善、生活の保障等、色々と論究されて居る有様だが、人の生活は單に衣食住の肉躰的方面に限れるもので無い。一方精神的方面の存在を無視することは成らぬ。其れにも關はらず、兎角に一方が忘られ勝ちに成るは遺憾である。善意に解すれば、謂ゆる衣食足りて榮辱あり、倉廩滿ちて禮節を知るであるから、先づ以て物質的方面を解決するが大切でも有らうが、然しながら、是が安定を得れば、次に是が改善を欲し、更らに是が充實を望み向上を謀るといふ如く、限度のあるものでは無く、終ひには享樂主義に墮し、デカダン流に走ることに成るで有らう。故に何うしても精神的方面も、是と共に講究し往く必要が有る。

二　精神界の食糧

一日の大事は食事にあり、一年の大事は衣類にあり、一生の大事は住宅に在りで、世に最も心細いことは、その日の食事に困るといふことで有らう。今精神界の食物とは何かといへば、そは即ち智識であると云ふのである。食物に上中下の段々あるが如く、智識といふ食物にも、上下淺深の別が無量である。智識といふても單に文字學問を指すのでは無い。古人も文字はこれ載道の器なりと言ふてある。即ち智識の御馳走を盛る所の膳腕に過ぎぬのである。だが文字暗ければ理に疎しで、如何な御馳走

も人物なしには喫べることが叶はぬ。故に人には學問教育の手を借り器を用ひて、智職の食物を充分に攝取するの必要がある。日常須要の謂ゆる常識とは、丁度麥飯に香々といふ位の食物である。專門の科學上の智識の如きは、ヤ、念の入つた料理に屬する。更に進んで一口一口の喫べた食物が、直ちに自分の血と成り肉と成り力と成つて無窮の生命を持續する處の珍味、斯る御馳走を求むべきである。これ即ち自己本心上に關する靈の智識、自己は畢竟何物ぞといふ自覺である。人はこの靈智靈覺の食物を喫するに於て、始めて精神的糧食問題を解決したものと稱すべきである。彼の孔子の高弟顏回が、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り、人はその憂に耐へず回やその樂みを改めず、賢なる哉回やと、其師の感賞を蒙つた所以のもの、亦實に彼が、この精神的食物の最上珍味に飽足して居たことを、立證するものである。扨かゝる珍味美食は何れに向つて求むべきで有らうか。曰くその供給所こそは即ち我が佛敎の門である。佛敎こそは其の一手大賣捌所である。欲するものは信の手形を以て自由に求め得るのである。

三　精神界の服裝

最も貧しい人は喰べることで苦勞するが、其上の少し樂な人に成ると、今度は着ることで苦勞する。冬が來たが外套が無い、春が來るが三人の子供に何を着せやうと、年中その服裝問題で苦しんで居る事だが、今それ精神界の服裝とは、全躰何を指すかといふに、釋尊は、慚愧の服を被せよ、と說き給ふた。內に獨り自ら良心に慚づる心と、外に人に對し社會に向つて愧づる心とを指すので、別言すれば道德といふ衣服である。太古の野蕃人でも南洋の土人でも、必ず何等かの衣服らしい物を腰に卷き附けて居る。如何に絕世の美人でも素裸躰で人前に出られては興が冷めるもの、人は身分相應、世は時々の定めの被服を必要とする。國には國民道德といふ、其國當然の服裝がある。仰いで天に慚ぢず伏して地に愧ぢず、獨り居て屋漏に恥ぢざるもの、實にこれ立派な

衣服である。世に智識餘りありて、道德の是に伴はぬものは、丁度日々山海の美酒佳肴に飽食して居て、然も身には襤褸を纏ひ居ると同樣、實に馬鹿氣た生活である。世に利功馬鹿といふ人物と、馬鹿利功といふ人物との二種ありとぞ。蓋し利功馬鹿とは、智ありて而も德なきもの、馬鹿利功とは、智は無けれども而も道德を守るものを指す。智あり德あるは、これ上乘なるも、止む無くばそれ馬鹿利功たらんのみ。斷じて利功馬鹿たるまじきである。身の服裝には、上中下樣々の品等があると同じで、道德にも亦、高級低級色々の階段がある。御互ひに古き弊衣を脫ぎて、新たな立派な衣裝を着ける樣に、時々に修養を勵みて、清新なる德行を進め往かねば成らぬ。亦たゞ權利だ義務だといふ冷たい道德や、個人本位人種差別の正義人道といふ、四角な衣裝だけではいけない。モット〳〵丸味のある溫か味の有る、優美高尙なる我國特有の、國躰的道德の衣裝に、意匠をこらすことが肝要である。

四　精神界の住宅

世間で衣食に苦しむ程度の人よりも、住宅難に惱む處の人は、ヤ、上等の部に屬するのである。けれども年中借家住居では、心に何となく落着が無い。何時店立を喰ふか分らぬのでは、誠に不安を觀ぜざるを得ぬのである。狹くとも自分の家屋敷に住むならば、是に越したる安心は無い。今それ精神界の住宅とは、何を指して言ふかといふに、即ち宗敎的信念これである。人にして宗敎的信念を持たぬ者は、丁度住所不定の浮浪人生活見たやうなものである。隨つて其人の衣服も、清潔を保つて居るはずは無いのである。一定の信仰といふ住宅を構へて居れば、ソハ實に不可侵權を有する所以で有つて、何物にも恐るゝなく、大安樂の生活が出來るのである。人は此の住宅の安定が出來て、始めて生活問題の最後の解決を得ると同樣に、精神的方面に於ても、確かなる宗敎的信念が定まつてこそ、眞の安心立命が得らるゝのである。扨その住宅に

も、和風あり洋風あり折衷式ありて、千態萬狀であるけれども、最も時代と國民生活とに適應せるものを撰みて、建築するの要あるが如くで、宗教にも其れ〳〵異なれる種々の宗教あるも、時代思潮と國民道德とに照して、その優秀適切なるものを撰みて、信仰の對象とするが肝要なることで、和服姿で以て洋式ホテルに宿るのは、何となく居心地の落附かぬものである。世には亦、道德さへ守れば信仰の必要は無い樣に、考へて居る向もあるが、人は只に惡心を轉じて善心に歸し、邪道を捨てゝ人道に入つたのみでは足らぬ。人道以上、正義以上に、更に一歩を進めて、崇高なる莊美なる道に上るべきである。斯は何ぞといへば、即ち佛道である。昔し印度國ガンヂス河の一支流に、一の渡船場が有つたが、一日例の如く多くの旅人が、渡し船に乘り合ひ、船頭は例の通りに船を繰りて中流に向つた。處が俄かに一天に黑雲が覆ひ重りて、一大强風雨が襲ひ來つたので、乘合の人々は驚きの餘り、總立になつて噪いだ爲に、船は忽ち覆沒し、人々何れも河中に陷りて、浮きつ沈みつの大狂亂である。時偶に一枚二枚の船板が流れ來るを見れば、人々は互ひに是を力に泳ぎ附かんと、押合ひ奪ひ合の一大亂鬪が、河中に於て演ぜられ、中にはその板にて突き殺される者もある。時に老若二人の佛弟子がヤハリ諸國順禮の旅僧として、件の船に同時に乘り合はせ、共に河中に陷りたることであるが、折しも流れ來つた一枚の大板が、彼の年少比丘の手に入つたので、彼は命ちとばかり、打喜びつ、是にすがつて岸に泳がんとせしを、老比丘は忽ち見やりて、年少比丘よ、何卒その板の片はしをば、我にも貸して呉れよかしと。年少比丘は、否なとよ此の板に兩人絶らば、共に〳〵沈み果んのみ、許し玉へと、棄て去らんと思ふ一刹那、忽ち思ひ浮べたるは、常日頃に大聖世尊の敎敕、有らゆる機會に上座に利を讓るべし、總ての場合に他人を救ふべし、これ菩提涅槃に入るの道なり、との御言葉であるのを考へるや、咄嗟の間に件の板を手放して上座に度し與へのである。老比丘は爲めに助つて、岸に達することが出來た。ダガ年少比丘は、折角手に入れたる板子をば他に與へたがため、危くも溺沒せんとせる折しも、釋尊は遙か

に神通力を以て御覽になり、此の信念堅固の年少比丘を憐み給ひ、即ち神力を以て彼を救ふて、難なく彼岸に泳ぎ達するを得せしめ給はつたのである。聽て此の兩比丘が共に佛所に詣するに及びて、世尊は爲めに兩比丘に向ひ、更らに無上の妙道を說示し給はれたので、兩比丘は共に頓に阿羅漢果を證悟したとある。

見よ此の人生の不安な生活は、恰も板子一枚の下は地獄と稱せらるゝ船中と同樣である。難船するに臨みて、銘々が各自に他を省みず、自分一人が助からんとアセルは、謂ゆる優勝劣敗、生存競爭の世間相である。中には他人手中の板をも、腕力をもて强奪せんとするものが有る。社會は是を目して、不正義であり非人道であると稱する。然し自分の幸運自己の力量で、當然自分の手に入れた板子は、決して他人に渡すの義務は無い。自分は飽まで是に依りて彼岸に達するの權利が有るのであるとする。此の如き、正義人道に外れねば其れで善い、他の權利を侵すなければ可なりとする。この人生觀に止まつたならば、世は如何に殺風景に化するであらう。更らに何の優美、崇高、微妙の點も無くなることで有らう。然るに幸ひにして爰に、彼の年少比丘が、己を棄てゝ他を救ひ、身を殺して仁を爲し、是を以て平常信仰せる佛陀の道と諦信し、その所信に殉ずるを以て佛恩報謝と心得、肉に死しても靈に生き、否な心身兩ながら菩提涅槃といふ宇宙の大法に一如するといふ、大信仰の下に敢然として、命ちと賴むの板子を他に與へて喜びとするといふ所の、我が宗敎なる安住所が此の世に存することは、如何ばかり我等人生の悅び事で有らうぞ。是あるに依て世は、正義人道以上に、權利義務以上に超越せる所の、博愛仁慈、獻身犧牲、沒我棄欲、救世利人、等の優美莊麗の高等德目を產み、血と涙に富める幾多の仁人志士を出し來つたのである。世の生活難に苦む人が、最初の食物難より進んで服裝難に至り、更に上つて住宅難を解決するが如くに、精神的方面に於ても、惡道より進みて人道に入り、人道より更らに進みて佛道に達し、靈性に對する生活問題を解決されんことをこそ、偏に切望する所である。

二　佛教に於ける修養の階梯

一　世間に於ける修養の階梯

修養の過程に階梯があるか何うかといへば、種々の階梯が說かれてある。先づ孔子流で言へば、謂ゆる十有五にして立志と云ふ第一段に入る。次に卅歲にして獨立の位に進み、四十にしては不惑といふに達し、五十にして知命と成り、六十にしては耳順となり、七十にして始めて、意の所欲に從がつて矩を逾えずといふ、最高階級に達すと有りて、即ち六階段に分けて居る。亦孟子流にて云へば、是を知るものは、是を行ふものに如かず、是を行ふものは是を樂むものに如かず、と三級に分けて有る。亦惡人が善人と成り、善人が賢人に進み、賢人より更に聖人に至るが如き階級の見方もあり、後篇の向上の一路中に道人が說くべく、善に反く人、善に冷淡の人、善を務むる人、善を樂しむ人、善惡を超越する人と、五段に分くるが如き、其他にも世上幾多の說き

分け方が有るものと思はるゝのである。

二　六凡四聖の階級

佛敎で修養の階段を說き明すことは、粗より細に入つて到れり盡くせりである。其内にも大まかに分けるが、この六凡四聖の階段で是を十界と總稱する、中に就て六凡は世人の物質的な、肉體的な方面を分ち、四聖は即ち精神的な靈的なる方面を分けたるもの、其の六凡の上位から言へば、第一段階の人は、生活苦といふ問題も知らずに、或は文化的、或は藝術的、或は自然主義的、或は浪漫的なる生活を送る人、第二段の人は、一方に生活の苦惱もあるが又一方には、生活の向上といふ樂みもあり、墮落することも有れば、淨化することも出來、苦樂得失の互ひに相半ばするもの、第三段の人は、日夜に競爭と勝負と爭奪と力鬪とに沒頭するの外、何の餘裕も無く、怨憎と憤怒の生活をなすもの、第四段の人は、そのプロとブルとの階級に論なく、日夜に物質

的の所有欲に驅使されて、無ければ得んと望み、少しく得れば多からんを欲し、既でに得れば失はんことを恐れ、財物の奴隷と成つて生活する人、第五段の人は、私利我欲の爲めに迷ふては理性を失ひ、邪念惡心の爲めに人道も忘れ、骨肉相ひ食み、同族相ひ姦して恥ぢ無きもの、第六段の人は、身から出た錆、惡因惡果で、身は鐵窓の下に呻吟し、心は罪障の責罰に惱亂し、日夜煩悶のドン底に暮らすもの、以上は六段の平凡階級とす、更らに四聖の方を下級より數ふれば、一に聲聞、とて佛陀の說法なり亦は、高僧、偉人名士等の所演の聲を耳にきゝて、大いに感激して自己精神の修養に志し、自己の安心立命を得んと努力する人、二に緣覺とて、他の所說に待つまでも無く、沈思冥想、獨座思惟、よく宇宙の緣起を明め、深く人生の歸趣を覺り、俗世會を超越して高潔の生涯を送る人、三に菩薩とて、超世脫俗の風、獨り己を潔くすると いふ如き、隱遁的の態度に出づること無くして、內には高遠の理想を抱くも、外には大慈愛の容顏を表し、世間に同化し民衆に一如しつゝも、巧みなる手段と聰明なる智

能を以て、善く一切衆人を指導啓發して、共に精神の修養、人格の完成に向けしむべく、一身を献げて盡す人、最後は即ち我人の理想點とする處の、自覺覺他の圓滿、智仁勇德の兼備、人類終極の到達者たる、佛陀世尊の最高位とす。以上の十階級中に於て、銘々は果して何の階段に屬するやを考へて、向上さらに向上の修養を務むべきであらう。

三　五十二段の階級

前記の十界中に於て、六凡といふ低級の方は言ふを要せぬとし、四聖中に就て果して我等は實際何れの階段を撰むべきかと云ふに、自己中心的なる聲聞も、隱遁的なる緣覺も、物足らぬ點があるとせば、何としても我等の進むべき實際の道は、即ち菩薩道より外には無いので、此の菩薩道に依つて進むものを、大乘佛敎徒と稱するので、他の聲聞と緣覺とは是を小乘敎と名くるのである。小乘は小さな乘り物の意で、大乘は

大きな乘り物の意である。そこで此の大乘佛敎徒として實踐し行く上に於て、五十二位の階級といふものを說かれてある。五十二位とは、十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺、以上を指すのであるが、今これを約して言へば、一に信の位、二に住の位、三に行の位、四に廻向の位、五に地の位、六に等覺の位、七に妙覺位、といふことに成る。簡短に是を說かば、先づ第一に信の位、信は道の元なり功德の母なりで、修養の最初には、何よりも佛陀の大人格とその根本敎義をば、信じて是に依準するが肝要である。是は宗敎上のことに限つたわけでは無い、科學上の定理でも、亦同じことで、先づ初學者は、先人の說を信じて掛らねばならぬ。小學校や中學校の生徒が、最初からニユトンやワツトやダーヴエンの說を疑ひ、一々器械的に歸納的に試驗の上でなければ、一も信ぜられぬと云ふて居ては、四則算一つも習得は叶はぬで有らう。受持の先生を信ぜずば、生徒が一々先生を試驗の上で採用するなんどゝ云ふわけにも往くもので無い。まして宗敎的修養に於てをやである。然し決して迷信、誤信で有つては成らぬ。間違ひの無い正しい信念を養ふといふが第一の位である。第二に進んで住の位とは、第一の信念が漸次に深められて、佛祖の往昔は吾等なり、吾等が當來は佛祖ならんの確信が得られ、朝々夜々に佛と共に起き佛と共に臥す、惡魔も我に於て何か有らんの自信が定まり、其信や一住不變、八風吹けども動せず天邊の月、此の信念ある處、それ千萬人と雖ども我れ往かんの、境界に進むことが、即ち第二の住位である。世には一端は日蓮主義にかぶれ、亦去つてキリスト敎に入り、轉じて天理敎に歸す、といふ如く一處不住の、浮草的信者が無いでも無いが、實に笑ふべく哀れむべき精神界の浮浪者といふべきで有る。人は必ず此の住の位に進まねば成らぬ。第三に行の位とは、既に堅固なる信念の安住が成立たからは、今度は內に抱ける信仰と、外に働く行爲との一致を謀らねば成らぬ。否な內に信仰の堅固なるものあれば、必ず、知らず〳〵美くしき行爲と成りて、手の舞ひ足の踏む上に表はれ來るはずである。其の實行力が段々と練れて來て、粗より細に進み、不完全より完全に向ひ、一步

〻々と一路向上し往くが、此の第三位である。第四に廻向位とは、凡そこれまでは只管に、自分が信仰を得ること、得たる信仰を堅固にすること、信仰に基づける實踐躬行を勵むこと等、つまり自分の修養が專一で有つて、亦他人の上にまでは、手が延びなんだのが、今度は一應進んだ眼を以て世の中を見れば、實に世の人々が氣の毒で氣の毒で、默つて見て居れず、自分のことよりも、先づ〻世間の氣の毒な人々をば、何とか覺醒さして、共に〳〵此の無上道を歩み度いものと、爰に止むに止まれぬ、仁慈の佛心を働かせて、何事の上にも社會本位、庶民救濟本位として、あれもこれもと廻向、即ち廻らし向けて世のために捧げ、衆生に奉仕するのが此の第四位である。次の第五位が地の位とある。地の位地門地大地等の地である。世間で名譽々々と云ふて、名譽を貪る人には、存外名譽が附いて來ぬ。名譽名聞等に意を注がずして、只管に世の爲めに働く時、何時とは無しに其人の名譽が高く成るもの。佛教修養上に於ても丁度その如くで、自己の安心とか自分の成佛とか、自分が極樂往生とか云ふ考へを措きて、止むに止まれぬ大慈悲の心から無所得心をもて、世のため人のため、道のため教のため、働き務める其内に、知らず〻何時の間にやら、自分の修養的地位が高まり、且つ堅固に成る處のもの〻其の高まれる心地上に於て、求めざるに諸々の功德莊嚴が、生成し增長する。是れこの第五の地といふ位である。扨その次は等覺に妙覺の二位、等覺とは最終理想の妙覺果滿圓成佛に、略々等しいといふ位であるから、不完全至極なる、我等の思想もて之を思議することも、不備なる言語文字もて之を說明することも出來ぬ。唯御互ひが最後の理想としては、是の圓滿完全の大人格たらんことを望みつゝ、一歩々々と、此の五十二段の階級を踏み進むで往くべきもので有る。

三　死生大觀

一　世間の死生觀は如何

人は何うして此世に生れて來たか、生れて何を爲すべきか、死して何うなり行くか、

實にこれ千古の疑問であり、萬人の疑團である。是に對し世間に有りふれたる、觀方は何うかと云へば、先づ一に快樂主義又は樂天觀で、人生は樂しかるべきもの、樂しみつゝ生きて行くべきもの、最大多數の最大快樂を謀る。是が人生の本義であると觀るの說であるが、人生の事實は往々この說を裏切つて居るを如何せんやである。二には厭世觀又は悲觀主義で、人生は悲哀に滿つるもの、世は涙の谷である、生も苦なり死も苦なり、生活の苦惱また日夜身に迫る人生一も樂しむべき無しとするもの、苦しこの觀を押し詰めて往けば、自殺こそ最後の目的といふことに成る。三には懷疑論的思想で、生といふも死といふも、古往今來、茫々として尋ぬべき無く漠々として依るべきなし、生も知るべからず死も謀るべからず、是に苦心するは愚である、只これを不可解として措かんのみと、これ亦淺つぽき刹那的な、自然主義的の生活に墮するに至るで有らう。四には現在主義の斷見論で、人は生れて死ぬ迄の間だけのもの、過去も無く未來も無し、精神とは肉體の細胞組織より生ずる、一種の働きに過ぎず、神な

く佛なく靈なし、有るものは單に物質のみと。是に依らば世は個人主義、冷たき世界、弱肉强食の恐ろしき世界と化するで有らう。五は一神敎的人生觀、曰く吾等は天の獨一神に依りて靈魂を授かり、神意によりて此世に生れ出たもの、ヤガテ神の敎を信ずることによつて、天國へ歸るのである。ツマリ吾等には現在世と未來世は有るが、過去世は無いと見るので、此の點が不合理であり、獨りの神に依りて造られしものが、何故苦樂幸不幸の別を生じたかは、不可解である。然し『不合理なるが故に我信ず』といはゞ問題外である。其他にも色々の死生觀が有るであらうが、一も以て我々の理性と感情とを滿足せしむるものが無いのである。人にシツカリした死生觀が無くては、生に處してアヤフヤに暮らす外なく、死に臨みて不安な死方をせねば成らぬ。故に承陽大師は、生を明らめ死を明らむるは、佛家一大事の因緣なり、と示されてある。

二　佛敎の死生觀

一トロに佛教といふが、注意せねばならぬ事は、傳統的の教説の中には、その實は佛教と純粋には目することの成らぬものが混じて居ることで、即ち釋尊以前からの、印度の世俗説や、婆羅門説でも、佛陀の根本的の眞意に相ひ反せぬ限りは、釋尊は其のまゝ當時の俗説でも何でも、取入れて御本懐を布演する便宜に供されたものが、少なからず有つたことで、例せば三界廿五有の説の如き、須彌山説の如きも其である。

扨、佛教の死生觀といふても、淺深の別あることであつて、先づ一には因縁相續觀を擧げる。因は主因、縁は副縁の意である。宇宙間の一切事物、人生間の一切現象、何事でも偶然の成立といふものはない。自分が今、爰に人として生れたのは、必然に人として生るべき因縁が和合して、生れたのである。その亦人間の中でも、白人にも黑人にも生れずして日本人として生れ、更に某を父とし某を母として某の家庭に生れたのも皆それ〳〵の社會的因縁、歴史的因縁、物理的因縁、生理的因縁、心理的因縁、其他樣々の因縁和合の結果、こゝに自分として生れ來たのが即ち自分といふ果報である。主因は主果を招き、副縁は副報を招ぐ。その果報が更らに因縁と成つて働き、以て次の果報を引く。何處までも相續して、過去の先きより未來の末まで生死相續するものと見るが、因縁相續觀である。二に刹那即永恒觀、我々の生命は、その部分々々に就て見れば、或は生れる或は死ぬる、その死も生れて直ぐ來るものもあり、五年十年で終るもあり、五十八十まで生きるもあるが、全體的に生命の流れを觀れば、決して生死なく、幾億萬年の過去より幾億萬年の將來まで、此の生命の種が保存され、相續され往き居るので、彼の河川の流れが、晝夜を措かず流れ〳〵て刹那も止まることが無けれども、然も河川そのものは、何時も〳〵同じ樣に相續すると同理で、生滅そのまゝに不生不滅、生死その儘に涅槃の相である。刹那その儘が永恒であると觀ずるのである。三には生命一體觀、進化論の種の起原から觀察しても知らるゝ如く、佛説の謂ゆる、我等生々の中に於て互ひに父母兄弟たりしもの、一切の男子は我が父とも見るべく、一切の女子は我が母とも見るべく、尋ね〳〵て其の根源を究むれば、宇宙

一體の生命に歸する、宇宙に內在せる大生命が分化して、千態萬狀の個々の生命と成る。かくて生々存々して盡くる時が無いのである。幻化の空身は生あり滅あるも、一靈の心性もと起盡なしと稱するもの即ち是である。前の第二に在つては、縱に時間的に死生を達觀し、爰に第三には空間的に死生を達觀したのであるが、更らに進んで第四に於ては、死生絕待觀に入らねば成らぬ。謂ゆる生や全機現、死や全機現で、生の時は全宇宙大の生命現顯である。死の時は個々の小生命は悉く死滅し盡して、個我といふものは成立せぬのである。生の時は生の獨立で、死の顏出しはせぬ。死の時は死の獨立で、生の面目は無いのである。觀じ來れば晨に生れて夕に死する、蜉蝣の生命も、以て短きにあらず、千秋萬歲の鶴亀の生命も以て長しとすべきでは無い。蜉蝣は絕待の一日を全うし、鶴は絕待の千年の齡を完うしたに過ぎぬのである。絕體の生と觀ずる時、生も生と稱すべきでなく、絕待の死と觀ずる時、死の死と名くべきがない。生とも言はず死とも言はずの古人の言、その旨や深し。然らば吾々は、晏如として、

死ぬまで生きて居れば其で善しとするかと云ふに、否な未だ是ならずで、爰に第五生命價値觀といふに入らねばならぬ。生命の價値は單に、分化し存續するといふに止まるもので無く、進化、發展、向上、完成等の內容目的を具へ、日夜に是が實現に働きつゝ有るもの、即ち宇宙的生命の本能である。此の宇宙的生命の本能に順應して、吾々個々の生命も亦、日夜に努力し往く處が無くてはならぬ。承陽大師示して曰く、我々がこの生死こそ、即ち佛陀の御命ちなり、是を厭ひ捨てんとするは、佛陀の御命ちを失はんとするなりと。亦曰く、我等が行持に依つて、諸佛の行持現成し、諸佛の大道通達するなり。然あれば即ち、一日の行持これ諸佛の種子なり、諸佛の行持なりと。我等は須らく佛陀と一體、宇宙と同體の、各自の生命を護惜して、光陰空しく渡ることと無く、各自の生命に附與せられたる處の、眞なる善なる美なる價値を發輝すべく、日夜に向上發展進化に努力し、宇宙的大生命の完成に參與する處が無ければ成らぬ。清淨法身佛といひ、圓滿報身佛といひ、千百億化身佛といふものを、遠くに求むべ

きでは無い。此の五十年の生命に即して、佛陀を體驗し、此の五尺の肉體に即して、淨土を建設せねば成らぬのである。

四　無常力の活用

一　自然界の利用と發明力

世間科學の進歩も、諸種の發明發見も、皆この自然界に存在せる處の物質と力用とを研究して、得たる結果に外ならぬので、瓦斯でも蒸氣でも電力でも、無いものを造り出したのではなく、有るものゝ力を利用するに過ぎぬ。佛敎で說く所の敎理も亦これと同樣で、自然界に無かつた道理をば、世尊が揑造し給ふたのでは無く、本來具足底の眞理をば、悟達し講明されたに止まるのである。その佛陀の說き明されたる眞理をば、何の樣に我等が實生活の上に利用すべきかを、謀るのは我等の考案次第である。今こゝに聞き古したる佛說、一切諸行は無常なりといふ命題に就て、如何に利用すべ

きかを考へて見たいと思ふのである。

二　無常とは何ぞや

諸行無常の春の花は、是生滅法の風に散り、生滅々已の秋の月は、寂滅爲樂の雲に隱る、なんど云へば、如何にも陰氣臭く、穴へでも引入れらるゝ心地するならんが、新陳代謝は世上の常規、變遷流轉は人事の當相と云へば、普通の言草であるであらう。佛敎では先づ何よりも、一大前提として、萬物は流轉して刹那も定止するもの無し、一切常相無しと提唱し、是を一の定理として、次に第二提案、故に世には常一主宰の我體なるもの無しと說き、更らに第三の提案、宇宙は畢竟するに平等一如の本體のみ實有なりと斷じ、終ひに進んで、無常變遷の個々の現象に即して、そのまゝ平等無差別の實在なりといふ、謂ゆる大乘佛敎の原理に到達することに成るのであるが、死滅を無常と見るばかりで無く、生成するも亦無常、個人の生老病死が無常であるばかり

で無く、團體の集散も、國家の興亡も、天地の成立破壞も、一切みな無常力の支配を免るゝものは無いのである。萬事を成立さするも無常、亦萬事を破壞するも無常である。斯る偉力ある無常の理を、如何に我等は利用すべきかを、講究して見たいと思ふのである。

三　學問事業に利用せよ

元日やまたうか〳〵の始めかな、元日や今年も有るぞ大晦日。無常を觀じ、光陰の遷り易きを考へ、壯年の衰へ易きを思ふこと痛切なれば、正月だとて呑氣に暮すことも成り難く、暑中休暇だとてブラ〳〵しては居れぬわけ、頭上の火を救ひ消すが如き思ひで、寸陰を惜みて學問に勉勵し、分陰を守りて事業に出精すること、偏へに無常觀の功果である。吾等毎日一時間宛も人より餘分に働くとせば、一年三百六十五時間と成り、是を一日八時間の割にすれば、全四十五日間の時間が浮いて出る。此の四十五日といふものは、御飯も喰べず煙草も御茶も不用の、眞實正味の勞働なり勉强なりの時間であるから、大なる德用日である。是と反對に、一日一時間を怠りサボレば、一ケ年に四十五日を損することになり、永久に取返しが附かぬのである。

四　順逆兩境の上に利用せよ

上つたらまた落ちぶるゝものと知り、つるべの水も無駄に使ふな。兎角人間は順境に向ひて、何事もトン〳〵拍子に都合よく進んで、成功するといふと、心に油斷を生じ、侈りを長じて、ヤガテ失敗の遠因たるに心附かぬが多い。何時までも有ると思ふな運と金、無いと思ふな不時の災難。好景氣の次には必ず不景氣が來るものと、無常を觀じて用心すれば、決して失敗は無い。亦反對に不景氣風が襲ひ來り、失敗したと云ふても、失望落膽して氣が狂つたり、鐵道往生するのも、是亦無常を觀せぬためである。不景氣風が一ト渡り吹き盡くした後は一陽來復の好時節が來ることは、必然の事であ

ると、是また無常を觀じて、ヂット觀念の眼を閉ぢて待つて居れば好いのである。彼の漢の北叟といふ人は、常に此の理を達觀して居たから、得意淡然、失意平然で、常人の如く何事が起つても、進退その度を失ふ如きことが無かつたといふが、曾つて自家の愛馬が病んで斃れた時、隣人が來つて悔みを言うたが、北叟は平然として、いや却つて善い事かも知れぬと云ふて居た。幾時もなくしてヨリ以上の名馬を、安價で手に入れる事が到來した。人また來つて是を賀すれば、彼は淡然として、ナーニ却つて善くない事かも知れぬと云ふ。彼に一男ありしが、此頃父親が新たに買入れたる彼の名馬を秘かに引出して是に乘馬し、駈けさした處が、ふり落されて終ひに大怪我をした。人々多く集りて見舞の辭を述べた。北叟は相變らず平然として、否ナ却つて是が善いのかも知れぬから、御心配は無用と、時人は且つ驚き且つアキレて歸つた。處が間も無く國内大いに亂れて戰爭と成り、地方の强健なる壯丁は、多く戰場へ引出されて、或は死し或は傷つく者が無數で有つたが、北叟の息子に於ては、先年落馬の爲に足を損じて居たがため、幸ひ家に在つて無事なることが出來たといふ。北叟の如きは實に、順逆兩境の上に無常觀を利用して、處世の妙諦を悟了せるものと稱すべきである。

五　家庭と社交に利用せよ

指切るといひし牡丹の手向花。と自分の一愛兒が有つたが、庭中に咲ける美麗なる牡丹花があるを、親は愛兒を警めて、此の花は大事な花なれば、決して手折つたりしては成らぬ、若し命に反いて此花を手折つたならば、御前の指を切るからよと。然るに件の愛兒は急病で頓死した。そこで親は今はとて、指切るといひし牡丹の手向花。凡そ世間で平生は至つて不和の親子兄弟でも、內心に及を懷く樣なる姑と嫁とであつても、若し一朝にして、その一方が死沒した場合には、我知らず同情悔恨の念が溢れ出で、扨も氣の毒な事で有つた、死ぬと知つたら彼の樣に、邪慳にするので無かりし

にと、慎ひ廻らすことゝなる。社交上の間でも同様で、彼の原首相が兇刃に掛つて敢なく成つた時には、平常は敵黨となりて相罵り合つた人々でも、皆一様に黯然として襟を正し、却つて生前の德を讃したのを看たであらう。無常の賴み難きを居常の念とせば、交際を圓滿にし、友誼を厚くすること幾何であらう。斯く無常觀の利益で以て勸忍、和合、信義、孝貞、忠愛、の德を招來し得るのである。

六　膽力養成に利用せよ

劍道武術の奥義は、油斷せぬといふ事である。とのことだが、今は平和の世でも、無常の世であるから、何時、敵が襲來するかも知れぬ。暗夜の道中に油斷は成らぬ。すれ合ふて行く人にも意を注げ、人を見たら敵と思ひ、火を見たら火事と思ふ。是が劍道の用心であり、即ち無常觀である。彼の昔し太田道灌が、上杉家のために謀られて、だまし擊に會つた時、泰然と槍先を手に握りて、『かゝる時さこそ命ちの惜しからめ、かねて無き身と思ひ知らずは』の辭世を咏んだとの言傳への如き、總じて大膽不敵、從容として迫らず、機を見て變に應ずる活作略は、亦これ無常觀の應用である。

七　宗教的入信に利用せよ

前に擧げたる諸般の利用は、言はゞ第二義的のものであつて、佛教の本旨は是に依りて、信仰生活に入ることに在つて存する。釋尊が出家修道せられた動機も、古來の多くの祖師方の發心も、多くこの無常觀が根本である。承陽大師の如きも、八歳の時に母堂に先立たれ、終夜その枕邊に侍しつゝも、捧げし線香の煙りの、立ちては消え、消えては立上る其の樣を觀つめられて、つくづく人生の無常を悟り、爰に出家を志されて給ひしと有る。實に無常を痛感する時は、貪欲名聞、權力威望、愛欲戀情、畢竟巨の力かあらんやである。身は朝露の如く心は波紋に似たり。國家の興亡も亦百年千年を期し難し。我等は此の無常の世界を離れ、否な此の無常の世界に即して、別に永恒

不變、常住不斷の、大安心を得たきものと、爰に信仰の門に入ることに成り、最後に無常觀より常住觀に歸し、生死に即して不生滅の大涅槃を悟り、此の身心其まゝに、佛陀の嫡子であるとの安心立命を得ること、實にこれ無常觀の眞髓を得たるものである。

五　正しき道

序　竪の道德と横の道德

從來我國では、孝貞忠順といふ樣な、上下の道德、即ち竪の方面は、充分に行はれて來たが、しかし正義とか公德とかいふ社會的道德、即ち横の道德は、餘りに發達せなんだことで有る。是併しながら、西洋諸國と比べて、我國民性が劣つて居るといふのでは決して無いので、つまり遠く外國から離れた島國であると云ふ事と、封建の制度が永く續いたことゝが、其原因であると思ふ。今後は大いに正義人道といふ如き横の道德を力說し高潮さして、その缺けたるを補はねばならぬ。

佛敎の實踐道德は、廣き社會即ち一切衆生といふを目標となし、正義を行ひ邪惡を破るといふを以て根元として有る。是を適切に御示しに成つたのが、所謂八正道といふ實行條目であるので、お互ひ佛敎信徒が日常生活に於ける必須の德目である。されば以下少しく之を布演して見やう。

一　正見

見とは見解見識の見で、宇宙や人生の上に對して、眞理に契ふ正しき見方をするのを正見といふ。正見を覆ひ罔ますものが僻見邪見我見謬見等である。先づ僻見といふのは、總べて物事の全體を見て兩面の理を達觀することが出來ず、一邊に片寄つた理屈を考へるのを云ふので、其間違つた根本觀念を佛敎では、惡平等觀惡差別觀の二見として誡めてある。彼の危險なる社會主義や無政府主義、極端なる共產主義等はこの

惡平等の僻見に陷つて居るもので、世の安寧秩序を亂し、社會の混亂を來し、人々勝手自恣の放蹤に流れ、恐ろしく厭はしき世界と成る處の見解である。露國の革命騷ぎは好き見せしめである。又惡差別の僻見といふは、彼の歐米の白人等が、自分達のみは特別天の神樣よりして選ばれたる優等人類であつて、其他の黃色人や黑人等は先天的に劣等なる人種であると誤想し、亦は人間の貴賤上下の區別は、天然自然に定まつた運命の約束で、權利義務にも差別のあるものと考へて、人を人とも思はぬ傲慢の振舞をするなぞは、惡差別の見解である。次には聰明利根博聞强記で色々と理屈を考へ分別はすれども、正理を得ず邪心して曲解するを、名けて邪見とは云ふので、彼の淺墓な自然主義や快樂主義、極端なる箇人主義や虛無主義、無神無宗教論、懷疑論、詭辯說、是等は皆世を危くし人を毒するの邪見である。次の我見とは深と淺との二樣の我見がある。淺い意味の我とは、自分と云ふものゝ識見とか體面とか奮思想とか、何とは無しに自我といふものに捕はれて、縱令心中に其非を知り其無理なることを悟つて居ても、猶その說を改めその非を棄つることの出來ぬ處の我見である。深い意味の我見とは、是に大小二通りの我があつて、小我とは五尺の肉體五十歲の壽命と限られたる此の一箇獨立の自分、飽迄他の人や外物と別物なる己といふものを堅く執つて放たず、從つてこの自我の附屬として智識感情欲念より、さては財產家族等を自分のものとして執着するも、實に達觀すれば四海同胞であり生命一體であり、天地同根で萬物一體、因緣和合の上に假に我と現はれ彼と別れしだけのもので、引き寄せて結べば柴の庵なり、元々實我實體なき假相なる由を悟らぬが小我の見で、大我とは、天地を創造し宇宙を支配する、常一主宰の神我體なるものが存在すると立つるの妄想である。今それ因緣相續の理を觀じ、生滅無常の狀態を察すれば、大我小我の二見を離ることが出來るのである。次に亦謬見とは、自分の智識が足らず、研究が屆かぬところからして、謬つた見解をして、自ら氣が付かぬことである。右に擧げたる僻見邊見邪見我見謬見等を離れて、原因結果の理を信じ、三世相續の理を信じ、常識に外れず

理性を失はず、中正不偏の眞理を究明し、秩序法則を亂さず、公明正大の見識を立つるが正見である。

昔時かの一休禪師が一本の曲り捻けたる木の枝を探つて弟子門人等に向ひ、お前達この木の枝を眞直に看ることが出來るか何うだ、悟りの開けた人の眼からは是が眞直に觀えるはずであると。衆みな口を揃へて、其は禪師の難題である、如何に悟道した人とて、曲つた枝が眞直に見ゆる筈は無いと。時に一門人あり前んで云ふ、私には其が眞直に見ることが出來ますと。禪師は更らに何う眞直に見るかと問ひつむる。一門人言下に答ふ禪師よ其木は正に曲つて居りますと。禪師は手を拍つて一笑された。此の曲つた物を曲つたと見、直ぐなる物を直ぐだと見、黑は黑と見、白は白と見て、明歷々露堂々と一點も僞りなく誤りなく看て取るのが、即ち正見である。

二　正思惟

正思惟とは日常の思想に於て、陰險、詐謀、貪婪、殺伐、婬猥、不平不滿、憤怒、嫉妬、猜疑等の人性の暗黑的方面の考へは、勉めて懷かぬ樣、亦色々の空想夢想妄想等を起さぬ樣にと心掛け、明るく高く美はしき情調を養ひ、純潔、溫潤、玲瓏、玉の如き德を養ふが正思惟である。人間の品位や人格の高い卑いは、其人の智識や學問の如何よりも、むしろ其人の懷ける感情に依る方が多いことで有るのであるから、常に勉めて此の正思惟を懷くが肝要である。正思惟の人は自然と心も廣く氣も輕く、萬事に樂觀を懷き、他人よりは愛慕され、日々歡喜に充ちたる生活を爲すことが出來、是に反して正しからぬ善からぬ思惟を懷くものは、心は陰欝に氣は結ぼれ、諸事に悲觀を生じ易く、人には忌み嫌はれ、煩悶の中に生涯を送ることに成るのである。我もし微笑をもて人に向へば、人も亦微笑を以て我に應へ、我もし眼を剝いて彼に對すれば、彼も亦唇を反して我に對するは必定で有らう。常に善からぬ思惟を持ち、妄想を逞くする時には、其が自己暗示と成つて、何時しか行爲の上に實行する樣になるものであ

る。佛陀の戒律では意業と云ふて、意中に思ふたゞけで、未だ實行せぬとしても、其が己に實行したと同樣の罪業であると說いてある。例せば彼は惡むべき我が身の仇である、殺してやりたい、死んで仕舞へと心に思へば、其で殺生戒を破つたものである。他人の妻女を見て、人知れず戀愛心を起したゞけでも、既に姦婬罪を侵したものと誡められて有る。動機が惡なれば結果を待たずして早く惡であるのである。

總持開祖瑩山禪師の御示に『念起これ病、續がざるこれ藥、一切の善惡、都て莫思量、纔かに思量に涉れば、白雲萬里』と。一念正しからぬ思惟が起れば、早くこれ病なることを覺つて、第二念を相續せぬ樣にするが良い。左すれば當處に出生して隨處に滅盡し、浮雲流水の如くにて跡を止めず、無自性にして如幻即空なるを悟るで有らう。此處を、一切善惡總に莫思量と示されたのである。若し次から次へと、其の思惟妄想を連ね續けて往けば、正道と相隔ること白雲萬里の迷ひと成るで有らう。三祖大師の信心銘に、至道無難、唯嫌二揀擇一、若無二憎愛一、洞然明白と。憎愛と云ふ感情の錯誤や偏頗さへ無ければ、至極の大道は難しきこと無く、正義人道も洞然明白に成るのである。

彼の罪惡を犯し、囹圄の人と成るのは、善惡の物の道理も充分に心得、斯うすれば斯うなると云ふ事も、解つて居るのだが、唯一途に思惟が正しくなく、盲目的感情に支配されて、遂に取返しの附かぬことを爲て仕舞ふのである。世の不良少年や墮落青年の多くは其の始め活動寫眞を看たり、卑猥の小說を讀みなどして、妄想空想に耽るの結果、次第々々に惡道に踏み込むのである。

一寸と云ふので、止むなく用立た金を、其後いくたび催促しても、返金する氣色が見えぬので、貸た人も腹を立て、每時もし〳〵一時遁れの口上ばかりは聞いて居られぬ、今日は是非確とした挨拶をして貰ひたいと迫ればイヤ誠に申譯が無い、私の方でも萬更見込の無いわけでも無く、二ツ三ツの見當も有るのだが、何れも急には運ばなくつて當惑して居る處で、と頭を搔く。その二三の見當と云ふは全體何か、其は貴殿の前

では御話し兼る。イヤ是非話せ。然らば申上ん然し腹を立てられては困る――先づ一には誰か路に百圓位入れた紙入でも落して置いたらうと云ふ當て、次には貴殿の家が火災に罹り、彼の借用證書が灰に成ればと、最後に貴殿が腦病にでも成つて、貸金のことなぞ全然忘れて呉れゝばと、其ばかり當にして居るが、ドレ一つとして急に物に成らぬので、遂々御無沙汰に及んだと云ふたゲナ。世には隨分これに似通つた邪思惟を懷いて居るものが無いでもなからう。佛様は切に我等に正思惟を御勸め下されて有る。

三　正　語

正語とは言語を正しくし、口舌を慎しむことである。正法念經に、『甘露及び毒藥は皆人の口中にあり、甘露とは實語を謂ひ、妄語は即ち毒と爲す』と說き、華手經には、『惡口し而して兩舌し好んで他人の過を發く』是の如き不善人、惡として造らずといふことなし』と說かれて有る。

虛言、惡口、罵詈、兩舌、綺語等を不正の語と稱するのである。虛言は盜賊の始めと云ふ位で、不正の利害心からして發する場合が多い。亦虛榮心から己れを飾つて善く看せ度と云ふ名譽心に驅られたり、只何とは無しに嘘を言ふて、人を欺むくを心地よく感ずる者なぞも少くは無い。我國の人には西洋人よりも、嘘を言ふ者が非常に多い由であるが、困つたものである。是は幼少の時からの敎育や習慣に因ることであるから、家庭に在つては注意して、兒童に嘘を言ふ習慣を附けぬ樣にするが肝要である。柳は綠花は紅といふが如く、天地萬物は皆ありのまゝにして、少しも嘘や僞りは無い。故にお互に人間萬事ありのまゝにして明々白々に言ひ表はすが、天眞の正道である。妄語と正語とには相反する種々の利害得失が伴ふ。正語の人は正直は第一の資本也とある通り、何の事業でも成功する。虛言者は多少の資金を持つて居ても、漸々と人の信用を失つて不成功に終る。正語の人は時偶に言ひ誤りや失敗が有つても人が寛

容する。虚言者は稀に眞實の言をいふても人が相手にせぬ。虚言者は常に人と交つて諍ひや苦情が絶えぬ。正語の人は平和の交りを續けて行ける。正語の人は子孫も品行方正で行末榮え、奉公人や使用人も忠實に働く。虚言者は不良の徒が家族の間から出で、雇人や部下のものが蔭日向をして損害を掛ける樣なことをする。虚言者は心中が穩かで無く常に一種の不安に襲はれて居るから、自然と人相も惡く容子も落附が無く、下賤の人間に見える。正語の人は胸中が常に穩かで寢ても安心醒ても平氣で、容子も自然と閑雅悠長で大人の相を表はす。正語の人には上等上品の人が交はり名聲が次第に高まり幸福が向つて來る。虚言者は下等下品の人のみが交はり次第に名聲も失墜して不幸悲運の谷底に落込むのである。

虚言の次に誡むべきは惡口罵詈である。嫉妬心や偏執心から他人の惡事罪狀を撥き缺點を數へ、又は無根不實のことを揑造して、好んで人の名譽を毀損し、又は盛んに惡罵漫罵を發して痛快がり、兩舌を使ふて中傷離間を策する等、亦は自負自慢自讃の引合に他人を貶する。何れも他人に損害を加へ、苦痛を感せしむる結果になるもので、正義に反ける言葉である。正見を開いて天地を達觀すれば、平等一如の實在の顯現である。自他の隔歴が何處に在るか。同胞同一の生命であり心靈無別のお互である。毀るべき相手や惡むべきの對敵が何處にあるぞ。同體和合は宇宙の眞理で、友愛親交は社會組織の基本であることを悟るが善い。承陽大師樣の御示しに「愛語といふは、衆生をみるにまづ慈愛の心を起し、願愛の言語を施すなり、凡そ暴惡の言語なきなり、中略衆生を慈念すること猶赤子の如きの思をたくはへて言語するは愛語なり、德あるは讃むべし、德なきは憐れむべし、愛語を好むよりは漸やく愛語を增長するなり、乃至向ひて愛語をきくは、面をよろこばしめ心をたのしくす、向はずして愛語をきくは、肝に銘じ魂に銘ず、知るべし愛語は愛心より起る、愛心は慈心を種子とせり。」と誠に難有き敎へである。常に惡口を恣にする人は、眷屬には厭ひ嫌はれ、鄕人には憎み疎んぜられ、自分で自分の威德を損じ、常に人からも缺點や短所や失敗を數へられ、敵を

求め恨みを結び、世に處して惱み多く、終には思はぬ禍ひを生じて身を喪ふにも至るものである。織田信長や石田三成、梶原景時の如き、何れも口舌を謹しまざりしために、身を亡ぼすに至つた適例である。

綺語とは綾のある言葉といふので、針小棒大の大法螺をふくことや、實事空事うちまぜて面白可笑く說き立たり、卑猥の話し婬卑の語を以て人心を攪亂したり、滑稽戲談、輕口語路合なぞ、總て不眞面目にして條理を亂す所の語を愼まねばならぬ。是等の言葉は、虛飾にして質直の德を損なひ、輕躁にして莊重の德を害なひ、多辯にして沈着の德を害なひ、繁雜にして簡易の德を害なひ、放逸にして謹嚴の德を害なひ、小人匹夫の群に立ちて、士君子と共に伍を爲す事成り難きに至るもの、淺間敷ことである。

以上擧げたる虛僞、惡口、誹謗、兩舌、離間、中傷、綺語等いやしくも正しからぬ言說を愼しみて、正義公道に契ひ、正直ありのまゝで、且つ優しく親切に、眞面目の言葉を使ふのが、即ち正語の敎である。

四正業

業とは、職業や業務の業では無く、所業いはゆる行爲のことを指すので、普通は意に思ふこと、口に言ふこと、身に行ふこと、是を身口意の三業といふのであるが、今こゝでは專ら、身に行ふ事を正しくせよと云ふ敎である。先づ國憲に遵ひ法律に服し社會の公德を重んじ禮讓節度を守り、善良なる風俗習慣に悖らず、公人としても私人としても、不正邪惡の行爲の無きが正業である。

扨その正邪善惡は、何を標準として定めるか、是が古今東西の學者間の問題である。佛法の上からは是を、本體上からと、現相上からと、作用上からと、三方面からして觀ることが出來る。本業瓔珞經に、理に順じて心を起すを善と名け、理に背いて起す心が惡であると說かれて有り、慈雲律師の語には、法性の理に依順するを善となし、法性の理に違逆するを惡と爲すとある。これは宇宙の法則、人の本性、自然の眞理を以

て善惡の本體と見るのである。亦唯識論に、現在と將來とに向つて自他を順益するが善で、違損するが惡であるとあるは、社會に及ぼす作用の上から見たのである。然らば何ういふことが理に順じた善で、何ういふことが現在にも將來にも、自他に損害を及ぼす惡であるのかといへば、梵網戒經に、常住佛性の慈悲心と孝順心との上から起る所の行爲、即ち生命の愛護、財物の保護、貞操の保全等は善の最なるもので、慈悲同情、感恩報謝の念に反する所の行爲、即ち殺生、偸盜、邪婬等は惡の最なるものであると說かれてあるは、具體的に現相の上からの見方である。

故に今正業とは、天地生成の道、萬物永生存續の德を察し、博愛仁慈の佛心に住して殘忍刻薄、無理非道の行爲なく、亦因果應報の理を信じ、正義正直の道を守りて、不義不正の利を貪らず、與へられざるには取らず、亦人倫の大本は正しき夫婦の間より起り、良風美俗は男女關係の明かなるより發する事を心得て、互ひに貞操を守つて純潔の美德を保ち、其他、自己の義務を盡くし、他人の權利を侵害せず、規律を正し禮讓を重んじ一般道德の軌範を守るを謂ふのである。德は得なりで、正業を守るの人は、その得るところの功も、決して少々では無いのである。正業の人は衆のために畏敬せられる、次には名聲が世に聞ゆる、三には世に處して怖るゝ所が無い、四には知足安分が出來る、五には家庭が圓滿で、六には子孫が善良の人と成る、七には家道が興隆し、八には諸佛諸神が冥々の中に守護を垂れ、九には安心解脫の境に入る、十には高き理想が實現し得らるゝ等である。以上は正業の略說で有る。

五　正精進

正精進とは、正善なることに向つて精しく進むこと、勇猛の氣力を以て、道に契へる事に向つて向上發展しゆくことである。世には役にも立ぬ徒らごとや、却つて我にも人にも、爲にならぬ善からぬことには、精を出し心を勞し金錢を費やし時間をつぶして稽古はするが、正しきこと爲に成ることには、至つて冷淡な人が多いのは、困つた

ことである。一夜の豪遊に千金を散ずるを意とせぬ人も、慈善事業に一金を喜捨するにも澁面を造り、圍碁や歌留多には夢中に成つて徹夜もするが、一時間の説教にも坐睡が出るといふが人情の弱點である。然しお互に其弱點に打勝つて、正精進を勉めねばならぬ。我等は體力、智力、權力、威力、學力、金力、其他一切の力といふ力を擧げて、正善なる事柄に向つて、全勢力を盡くし最善を盡くして働かねばならぬ。活動は天地間の眞相である、向上は萬物の氣運である、正精進は佛敎徒たる吾々の生命の源泉でなければならぬ。小事を輕んじて成らぬ、大事に驚いて成らぬ、萬事に眞面目で有つて欲い。

此正精進には、消極的の精進と積極的方面との兩面がある。消極的精進とは、自分の罪過を悔い改め、缺點を撓め直し、克己自制に務むるのを云ふので、彼の長門の瀧鶴臺の妻が、白糸と黑糸との手毬を二つ袂へ入れ置いて、惡い事の有つた時には、黑糸を卷き、善い事の場合は、白糸をつゞり、自己修養に力め、亦彼の支那の袁宏道と云ふ學者が、功過自知錄といふを作つて、人格向上を謀つた樣なこと、其他、酒で失敗した人が禁酒を斷行したり、朝寢好の人が早起を勵行すると云ふ樣な事は、みな消極的正精進である。積極的正精進とは、敎育御勅語の、學を修め業を習ひ、以て智能を啓發し、德器を成就し、進みて公益を廣め世務を開きといふので、大智大能の佛力に依り、大慈大悲の佛心を體し、世のため人のため道のために、奮鬪努力するの謂である。人は單に惡いことをせぬからとて、其で善い人であり、立派な人であると云ふわけには往かぬ。惡い事をすれば、惡人で、惡い事をせぬなら、惡人ではないと云ふに過ぎぬ。一歩進んで善事善業を勤めてこそ始めて善人と稱することが出來る。吾等は善を勤むる上に、更に善を樂しみ善を愛する所に進み、やがて善惡を超越して德に合致し、善人より賢人に、賢人より聖人に、聖人より更らに進んで、大聖佛陀たるに至らんと正精進を續けねばならぬ。

達磨大師が、如來より廿八代の嫡嗣として、支那へ渡來されしは、百卅歳の時であつ

たと云ふ。夫れより少林寺に面壁九年の末、二祖慧可大師を始め、多くの高弟駿足を出されたは、當に彼の大隈侯以上の抱負實歴で有つたのである。

豊前の國耶馬溪は、天下の名勝地である。その競秀峯より羅漢寺に通ずる洞門がある、所謂山陰鑿道と稱するもの。此は今より二百餘年前東山天皇貞享中、越後高田藩に福原勘太夫の子で市九郎と云が有つて、餘り亂暴の性質なりし爲、拾五歳で勘當の身と成り、出て江戸の中川四郎兵衛に仕へたが、私憤のために主人を切殺し、木曾山中に遁れて山賊生活を送りしが、一夕翻然と悟る所あつて、前非を悔い、發心剃髪して六十六部の修行者と成り、流れ〳〵て豊前宇佐八幡より、此の耶馬溪へと詣でたが、當時の嶮路たる鎖り渡りの棧道を看て、參詣人の不便難義を氣毒に思ひ、一大洞門を開鑿せんと發願したのが始めで、時に享保十九年彼が四十九歳の時であつた。彼は安樂禪院に入つて得度し、名を禪海と改め、斯て一挺の鑿を以て終日孜々として岩壁に對し、拮々として開鑿に從事する事前後三十年、遂に見事なる洞門が出來上つた。高さ二丈幅三丈長さ三百八歩といふ、宏大な物が、彼偉僧禪海が三十年間不撓不屈、大精進力の結果である。彼は後に近傍に庵居して八拾八歳に至り圓寂したといふ。

六　正　定

定は具に禪定と云ふので、神を靜め氣を落附け、眞智を開發して一定不變の亂れざる心を把持するの謂である。禪は坐禪の事で、定の力を得るには、坐禪を以て要道とする。方今靜坐法とか、催眠術とか、氣合術とか稱するものは、亦一種の坐禪の變化應用である。然しこの禪定にも、正しき禪定と、正しからぬ禪定との區別あることを知らねばならぬ。古來この禪を分けて、外道禪、佛小乘禪、大乘禪、如來禪、祖師禪、等の名を列ねるも有る。彼の世界創造の神を冥想して、天國に生れんことを默禱するとか、念寫や透視の術を究むるとか、云ふのは、外道禪である。四諦十二因緣や、四念處觀の如きは小乘禪の觀法である。天台の三觀とか眞言の阿字觀とか、華嚴の四方

界觀とかは、大乘の禪觀である。如來禪とは、明星下に悟道し靈山會上に拈華せし、如來の心地を悟るのである。祖師禪とは、此如來禪を嫡々相承して、達磨大師に至り、大師親しく東土に傳來され、次第に分派發達して、曹洞臨濟其他、五家七宗を出せし、親參實悟の禪を云ふのである。禪定には斯く色々の區別が有るもの故、邪師に就て邪定を修すれば、邪魔と成り禪天魔と成るも測られぬもの。依て正師家を求めて正法を聽き、正禪を修し正定に住すべきである。眞實の正禪定を修行したいと云ふ人には、不德ながらも道人その伴侶と成るで有らう。如何なるかこれ正定と人の問ふあらば、答へて曰ん、鷄寒くして巢に上り、鴨寒くして水に入る。

西鄉南洲の語に、世の中に金も入らぬ、名譽もいらぬ、生命も入らぬと云ふ奴ほど、始末に困るものは無い、然しこの始末に困るもので無ければ、共に大事を圖るに足らぬと。所謂この始末に困るものとは、富貴も婬する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はぬ人で、守る所を守り、止まる所に止まり、定まる所に定る大丈夫の人、

是を正定とは云ふのである。

道人は世の種々の職業の人々の話を聞いて、不審に思ふことは、多くの人が各自の職分を、喜び樂しみ安んじて居らぬ樣子の見ゆるは、何うしたもので有らうか。先づ農家の人は云ふ、田舍の百姓なぞは實につまらぬもので有る、年中不味ものを喰べ、粗末の衣服を着て、泥だらけに成つて暮らさねばならぬ、其處で町場の商人が羨ましいと。去つて商人の言ふことを聞けば、否々私等程に苦しむものは無い、同業者間の競爭は烈しく、仕入は騰る金利は高し、貸は取れず、トテモ遣り切れたものでは無い、一番善いのは月給取で有らうと。スルト亦その月給取の人は云ふ、成程高等官何等で幾百圓の俸給を貰ふは善いが、いつ何時、官界の大地震で、休職免官の憂目を見るも謀られぬは、我々の不安を感ずる點である、藥九層倍のお醫者さんか、イツツまる儲けの坊さん程よいものは有るまいと。結局銘々に自分の職分天職に滿足し、悅び安んずる考へが無いから進步發達が不充分であるはずである。此點に就ても、この正定

の修行が必要で有ると信ずる。

七　正念

正念とは正しき信念を持つこと、即ち正しき宗教を信じて、安心立命することの謂である。世の中に大丈夫なもの、一番たのみに成るものと云ふは、何もので有らう。夫妻親子の愛か、金力財産か、門地名望か、學問智識かと云へば、何れも否と答へざるを得ぬので有る。智識は有限であり學問は假定である、昨日の眞理は今日の非と成り今日の肯定は明日の否定と成るでは無いか。昨日の成金も今日は無一物の本來空と成る、賣家とからやうで書く三代目で、子孫繁昌も當にはならぬ、老少不定で後れ先立つ世の習ひ、親子夫婦も頼りに成らぬ、總べて自分以外のものは頼りに成らぬ、自分の心の外には頼りになるものは無い。絶待無限の力を持てる佛、無量の壽命と無限の慈悲と無上の智惠とを具し玉へる如來に、歸依信仰する自心の信念こそは、力の中の

力である、最も確かなる力である。宗教的信念ある人には、勇氣が有つて恐れが無い、確信が有つて疑ひが無い、安心が有つて煩悶が無い、光明が有つて暗黑が無い、向上が有つて墮落が無い、樂觀が有つて悲觀が無い、久遠の生命が有つて刹那の幻滅が無い。一口に宗教と云ふても、世に宗教の數は幾らあるか知れぬ程の多數にある。信じさへすれば何の宗教でも善いと云ふは、餘りに冒險的である、歸依さへすれば何宗教も同じことで有るとは、金石龍蛇を辨へぬ論である。斯る無頓着のことでは、結局どの宗教をも信ずることが出來ずに了ふことで有る。然らば信仰の標準は何に依るものであらう、宗教選擇の尺度は何處へ立たもので有らう。道人は爰に五通りの標準を立て見度いと思ふのである。第一に正しき宗教は合理的で有らねばならぬ、勿論宗教は學理では無いのだから、一から十迄、科學や哲學の說く所と一致せねば成らぬといふ筈は無い、否な科學や哲學以上に超起した所が有るべきである、然し超理的であつても背理的で有つては信ずるに足らぬのである、彼の無因有果の有始無終的創造說や、自然

現象や庶物を崇拜して神とすることや、其他常識に訴へて不合理と認むるものを避ねば成らぬ。第二に道德的で有らねばならぬ、是も道德と云ふものは、時代に依り地方に依り、多少の變遷の有るもので決して絶待的のものでは無いから、宗教が超道德的なる點の有るは妨げぬ、然し反道德的で有つてはならぬ、即ち個人としても公人としても、其時代に應じて一般の人道を守り、其國家に應じての國民道德をも守らねば成らぬ、公私總べての義務に忠實であり得る宗教で無くては成らぬ、或宗教の信者だからとて兵役を忌避したり、一夫多妻を實行して予はモルモン宗徒で有ると云ふが如きことは、此標準に合格せぬ信仰である。第三には世界的で無くてはならぬ、自分達のみが特に天の神から選まれたる恩寵の民であつて、其他の人種は劣等の民族であると迷想したり、又は一國に崇拜せらるゝ種族神や地方神なぞ、共に世界的の標準に合はぬ宗教である。第四に物欲的對象で有つてはならぬ、即ち壽命や利得や健康や甚だしきは戀愛やを求めんが爲めに信ずるは、正しき信仰と許すわけに往かぬ、勿論眞實に正しき信仰を捧ぐる結果として、自然に是等の幸福が向つて來ると信ずる事は妨げぬ、最初から是等の欲望を目的として信ずるは、正念では無いのである。第五に理想的で無ければ成らぬ、人心自然の最高理想たる、眞善美の三大目的に契ひ、人性全體の圓滿完備を期し得るの信念で無くてはならぬ。

以上の五大標準に添ふ所の宗教を選びて正しき信念を持つのが第七正念道で有る。

八　正　命

命とは命根とか生命とか續く字で、生活のことを指す、即ち正しき道に依つたる生活法を謀るを、正命とは云ふのである。具さには正命食といひ、是に反するを邪命食と云ふ、總じて不正の手段を以て利益を謀ることは邪命である。今その重なる箇條を列擧すれば、一には虛僞を以て利を謀ること、則ち詐欺的行爲である。二には賭博的の手段を以て萬一の幸ひを期すること、經濟的原則に基かず、因果關係を無視した利得

は邪命食である。三には諛諂を呈して卑屈の利を求むる事、是は幇間や娼婦の行爲で有つて、堂々たる一人前の人格者の爲すべき事では無い。四には恐嚇手段に出で他の弱點に附け入つて、强ひて不正の利を占むるは邪命である。五には不公平の處置を以て利を謀ること、贈賄や收賄の利益を交換したり、職權や位置を害用して不正の利を謀るは邪命である。六には違約食言を爲して他に迷惑を及ぼし、己れ獨り利を專らにすること。七には暴利を貪つて他の苦痛を顧みぬこと。八には粗惡品を賣りて己れ一時の利を貪ぼり、組合とか同業とか會社とか、大きくすれば國民全體とか、所屬團體の名譽も信用も重んせぬこと。九には世に有害無益の業を營むこと、吾々は吾等の祖先幾千百年以來、社會重々の恩惠に浴して今日に至つたので有るから、我々も亦幾分かは社會の發達に貢献するつもりで、成るべく世の中の爲めに成り、人々の眞の幸福を增して行く樣な職業を選むべきである、假りにも世に害毒を及ぼし、人の不爲に成る營みは是を避ねばならぬ。十には徒食無爲にして安逸を貪ること、假令その家に充分の資産が有つて、何の仕事を勤めずとも、安樂に生活が出來る身分で有つても、徒らに爲すことも無くして世を送るのは、やはり邪命である。受けたる四恩に報ゆる所なくして生を過すは、所謂これ恩盜人である。人生といふ旅行に於て、社會といふ宿屋に泊つて、宿料を拂はずに逃て行く無錢飲食の喰遁の徒で有つて、不名譽の人達である。

大凡かゝる邪命食を極力さけて、公正なる生活法を謀り、意義ある人生を送るのが正命の敎である。

以上正見、正思惟、正語、正業、正精進、正定、正念、正命は八正道と稱して、敎主釋尊が阿含經や其他に說かせ給ひて、我等佛敎徒に依るべき道、守るべき敎を示された實踐條目である。異端虛無寂滅の敎は其高きこと大學に過ぎて實なし、なぞと書た支那の先生達は、斯る實敎の有ることを知らなかつた者と見ゆる。高い佛の道といふも、深い悟りの道といふも、要は此の八正道を實地に踐み行ふ處にあることを忘れて

はならぬ。殊に現代道義の缺陥を補ふには、斯る尊き教を力説することが肝要である と信じて居るのである。

六　佛法の眞實義

一　鳥の巣和尚の佛法

昔し支那の唐代に、鳥窠道林禪師といふ、名高い禪僧が有つた。此禪師は一ト風かはつた人で、日常、木末の枝の上に板をならべて牀をこしらひ、其上に坐禪をして居た。それで時の人が、鳥巣和尚といふ字を付けたのである。丁度同時代に白樂天といふ學者が在つた、禪師の居らるゝ杭州の知事公となつて赴任し、師の德望を聞いて、特に往いて參問せられた。處が禪師が例の通り、樹上に在つて坐禪をして御座つたので、知事は是を見て、險なる哉〳〵、あぶないことを爲る、降りなさいと聲を掛けた。すると禪師、老僧何の危險かあらん、閣下が危險こそ最も甚だしとやつた。白樂天云ふ、某は位は以て江山を鎮す、何の險か是あらん。禪師即ち誨へて曰く、兵馬の權を以て無常の大敵を防ぐに由なし、高位高職もそれ此の生死問題を何うともすることは出來まじと。爰に於て白は則ち、禮を設けて改め問ふ。如何なるかこれ佛法の大意と。禪師は言下に答ふるに、彼の七佛通誡偈と稱するところの、諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛敎、の七句中の、前二句を以て示さる。白は笑つて云ふ。かゝるが如きは、三歲の孩子も猶よく知る處となす、何ぞ堂々、佛法の大意とするに足らんやと。禪師は更に答ふる樣。三歲の孩子は猶よく知ると雖も、八十の老翁も遂に善く行ふに難きなりと。白樂天は終ひに伏膺したといふ。

即今、拙衲はこの七佛通誡偈の文字を辿つて、吾が禪門の立場から、佛敎の大意本領を述べて見たいと思ふのである。

普通に、この偈文を和訓して、諸〳〵の惡を作すことなかれ、衆くの善を行ひ奉るべし、自らその意を淨くせよ、これ諸佛の敎なり、と讀みならはして居る。果して是が佛法

の大意で有るであらうか。祢は、是では決して佛法の大意には爲つて居ないと云ふのである。何を以てか然か云ふ。諸の惡は作すことなかれと云ふ、是は世間の法律の大意で有るかも知れぬ、衆くの善は行ひ奉るべし、是は倫理道德の大意で有るであらう、自ら其意を淨くせよ、是は世の謂ゆる、修養の大意で有るであらう。けれども、斷じて佛法の本領とするには足らぬと、祢は信ずるのである。

二　偈文の讀み方

然らば七佛道誡偈に不足があるのか、道林禪師の答話に不是處が有るのか、否な決して左樣では無い。只それ偈文の見方が惡い、讀み方が違つて居る。是を佛法の大意とするには、次の如く讀まねばならぬ、但しこれは或は、祢一流の讀方かも知れぬ。

諸惡は作すこと莫し、
衆善は行ひ奉る、
自ら淨き其の意、
是の諸は佛の敎なり、

斯く讀でこそ眞の佛法の大意となつて生きて來るのである。今こゝに說き明すに當り便宜上、先づ第三句より始むとせん。自ら淨き其の意、淨といふのも汚穢に對する淸淨の淨では無い、自らといふも他に對するの自では無い、意といふのも心意識の意では無い。自と云へば宇宙全一の全體現たる自己本身を指す。淨と云へば、何れの處にか塵埃を惹かんやの、妙淨地である。其意と云ふは、牆壁瓦礫であり、破木杓脫底桶である。是諸佛敎とは、黃卷赤軸や三乘拾二部經のみを云ふでは無い、山河大地日月星辰である、長短方圓靑黃赤白である、蛙鳴雀噪溪聲雨聲である。其の當體が直に諸惡莫作、一衆善奉行である。と斯く言ひ放つたのでは、一定めし不可解であるならん、更らに嚙み碎いて說くとせんか。

お互ひの本心本性は、元來純潔淸淨、一點の塵埃なく、一翳の雲霧なし。佛陀靈覺

の眞性、自己本來の面目、是を明らめ是を悟るが、即ち佛法修行の要點なり。この靈覺の自性を悟らず、虛假不實の妄念に迷ひ、幻化空體の煩惱に惑はされ、繩なき繩し自らを縛され、自ら苦しみ嘲り悶ゆる、是を可憐の凡夫とは云ふのである。人もし一念の妄想煩惱の起つた時、直ちに其の起る一念の元に向つて、これ何ぞと回光返照して見るがよい。妄想の妄想とすべき實體なく、煩惱の煩惱とすべき本體なく、空虛無一物なるを見出すであらう。この時に自ら淨き其の意がチラリと姿を表はすであらう。正直も至誠もこの本心の働きを云ふ。この意が上に向つては、感恩報謝の念となりて現はれ、下に對しては、慈悲愛憐の情となつて現はれるのである。この自己本來清淨なる本心を握つた時を見性悟道とも、正信獲得とも云ふのである。この清淨身には、元來自他の別なく生滅の相も無い。道元禪師の御示しに、佛道を習ふと云ふは自己を習ふなり、自己を習ふといふは、自己を忘るるなり、自己を忘るるといふは、自己の身心及び他己の心身をして脫落せしむるなり、脫落せる自己をして長々出せしむるなり、とある。亦の御示に、佛道を信ずといふは、自己元より道中に在て、顚倒せず迷惑せず、妄想なく誤謬なきことを信ずるなり、とある。自淨其意を正信し、確信し諦信する處に於て、我等の行爲が諸惡莫作となつて表はれる。諸惡は作すこと勿れと制止する文字と見てはならぬ。諸惡は作すこと莫きなりで、諸惡おのれみづから解脫の當體であるのである。怪を見て怪とせざれば、其怪おのづから散ず、諸惡その體、畢竟して無自性なり、不可得なり、假相なり空性なりと認め得た處に於て、幾重りの諸惡なりとも、莫作となりて消散するのである。

三　長者の一子

法華經中に、巧妙なる譬喩談が出て居る。或る都城に、長者の一家が在つた、幾代も連綿と續いて來た名家で、巨萬の富を有し、大なる榮譽と權勢を保つて居た。彼に一人の嗣子が有つた、父なる長者は掌中の玉と愛で育てた。然る處が其子が、八九歳の

時に、フトした機會で、己が生れた長者の家を迷ひ出で、彼處や此處とまよひ歩き、惡漢のために誘拐されて、再び生家に歸るを忘れ、國々を流浪し廻る中、己が身分をも忘れ果て、或は無賴漢の群に入り、或は非人の間に交り、倫落の極に陷りつゝも、幾年かを經過し來つた。父なる長者は、天にも地にも只一人の愛子を見失ひて、悲嘆限りなく、人を雇ひ金銀を惜まず、全力を盡して我子の行衛を尋ね求めた。幾年月の久しき後に、廻り〳〵て彼は偶然にも、疲れし足を引きながらも、自分が生れし長者の家の門に立つた。父なる長者は忽ち是を見て取て、その我子なることに心附き、非常に悅びて門内に呼び入れ、先づ從僕として使ひ置き、頓て時機を見て膝下に招ぎ寄せ、親子の名乘り明しを遂げて、芽出度も家名相續の大團圓を告げたと。是はこれ何事を明したものか。

如今吾等お互は、長者の一人子といふ、立派な本心淸淨の資格を、持つて生れて來たので、經中にも汝等は當に成るべき佛なりと說かれてある。然るに何時の間にやら、自らその本來の資格を忘れ果てゝ、顚倒の迷ひから、紅塵萬丈の街に立ち出で、煩惱の誘惑に引れ、永く罪迷苦の旅路を續けて來た。吾等の慈悲なる御親、佛陀世尊は愛愍の念止み給はず、誓つて本覺の家鄕に其兒を喚び返し給はんとの御心にて、無限の法財を用ひ無量の方便を講じ玉はれた。その慈悲方便の御親の念力に誘引されて今や我等は圖らずも、自己本家鄕の門に立ち、爰に信仰の門に入ることが出來、自淨其意なる長者の一子に相違なきことを悟り、諸佛同體の靈格を認め得た。省みて越し方のことを思ひ廻らせば、知らぬことゝは言ひながら、慚愧の念に耐へ難く、悔恨の涙の禁じがたきものが有るのである。我しらず親なる佛陀の御前に頭を下げて、ア、惡かつた濟まなかつたと　詫る一念の淨信が起る。この一念發起の淨信をば、宗敎的儀式といふ形の上に移したるもの、是を我が禪門に於て、懺悔滅罪の法門と稱するのである。道元禪師の御示に、佛祖憐みのあまり廣大の慈門を開き置けり、これ一切衆生を證入せしめんがためなり、人天誰か入らざらん。とあり又、然あれば即ち、淨心

を專らにして前佛に懺悔すべし、しかあるときは前佛懺悔の功德力、我を救ひて清淨ならしむと。御示し下されてある。此時に始めて諸惡莫作の法門が、心に具はり身に現はれるのである。

四　家憲の遵守

扨、ア、惡かつたといふ懺悔の淨信が起つたなら、其次に起る處の本心の働きは、必ずや是から後にキット、善い事を致しますといふ、誓ひの心で有らねばならぬ。慈愛に滿てる親なる佛陀は、我等の頭を摩でさすり、オ、善き子よ、悔れば淸し改めれば全たし、是から後は必ずともに、親に心配を掛けぬ樣、親の敎を守れかしと　優しき言葉が有るに違ひなし。是が即ち修善奉行の當體で、禪門では是を　受戒入位の法門と名くる。彼の長者の一子が、本家鄕に歸來し、親子の名乘を爲し、一家の相續人といふ資格が定れば、一家の家憲といふものを守らねばならぬ　佛戒といふが即ちその家憲である。故に經中に、衆生が佛戒を受れば即ち諸佛の位に入る、位は大覺に同うし畢る、眞にこれ諸佛の子なりと、證明の文がある。この佛戒いはゆる家憲は、十六ケ條の細目に別れて居るが、大體は三歸戒と、三聚淨戒と、拾重禁戒との三大綱目に過ぎぬのである。

三歸戒とは、一に歸依佛とて、人々本具の靈性、天地に偏滿せる實在、そを覺明せる現在的佛陀釋迦牟尼世尊、その佛陀世尊の德相妙用を、永遠に表現せる物質上の諸像是等に投合歸命する純淨の信念。二に歸依法とて、宇宙萬有の間に嚴在する一定の法則より、社會や人生に於る一切の法則制裁、有限と無限とを結合せる佛陀の敎理經說、儀式作法等、是等を尊崇し遵奉する敬虔の信念。三に歸依僧とて、僧は梵語で譯して和合又は調和の義となす、卽ち宇宙間の萬象調和の妙用、國家人類和合の德相、乃至この最尊無上なる佛敎の、敎主敎法敎祖敎師敎徒を込めたる、大敎團に歸向信賴してそが開發進展に努力する熱誠心。是等を三歸戒と稱するのである。

三聚淨戒とは、一切の實踐道德を總べ聚めたる戒律で、一に攝律義戒とて、一切の規律法則、秩序儀禮、節度制裁を守り、有らゆる惡德は決して犯すまじと誓ふこと。二に攝善法戒として、個人としても公人としても、家庭に於ても社會に於ても、總ての美事善行は、必ず進んで行ふべきを誓ふこと。三に攝衆生戒とて、自己のみの利益、自己のみの修養を謀ることなく、世のため人のため眞實の幸福を謀り、殊にその靈性の開發、德性の向上に就て、最善の貢献を爲すべく務むること。要するに此の三聚淨戒には、一切の宗教道德法律の精神を包容したるものである。

拾重禁戒は、つまり前の三歸戒と三聚淨戒の細目とも云ふべき戒で、茲には名目だけを擧げる。第一不殺生は生物愛護の戒め、第二不偸盜は廉直潔白の戒め、第三不邪淫は男女間の純潔を保つの戒め、第四不妄語は虛僞を避け正直を守るの戒め、第五不酤酒は酒を賣りて人を不善に誘ひ、又は世の害毒となることを人に勸むる勿れと云ふ戒め、第六不說過は佛祖の敎法を信ずる同一敎徒間の過失を、他に發表して威信を損ずるなと云ふ戒め、第七自讃毀佗とは自分が名聲を擧げんがために、その引合に他人を毀り傷めるなの戒め、第八不慳法財戒とは金錢等の物質でも、敎法等の精神上の寶でも、人の爲には慳まず施せとの戒め、第九不瞋恚とは、一念の腹立や嫉妬の妄情に驅られて、人を惱め自らも苦しんでならぬと云ふ戒め、第十不謗三寶とは口に於ても身に於ても、亦は意に於ても、三寶とて敎主敎法敎團を謗り毀つが如き、不信を敢てしてはならぬといふ戒め。以上を拾六條戒の略說となす。

五　一戒光明裡の生活

然し乍ら是等の戒法は、必ずしも禁止制裁の義とのみ取り、防非止惡の意とのみ見てはならぬ。常住不變なる佛心の作用が人に對して働く場合には、キット慈悲心と孝順心と正義心と成つて現れるもの、この佛心の作用これが即ち戒法の根本精神である。達磨大師の註釋に、戒とは是れ覺の義、佛心を覺るを以て眞の受戒と名くといふ意に

述べてある。自性霊妙なる佛心を明らめ得た處、自ら淨き其意を信得した端的に於て、この十六條戒も身に具はるのである。故に戒はこれ諸惡莫作で、作すこと莫きの義、亦これ衆善は奉行なりの義で、是諸佛敎が頭上漫々脚下漫々と、分明に現成するのである。道元禪師の御示しに、諸惡莫作と願ひ、諸惡莫作と行ひもてゆく、諸惡すでに造られずなりゆくところに、修行力たちまち現成するなり、この現成は靈地靈界靈時盡法を量として現成するなり、とある。結局、自淨其意を信得及した修行者に取ては、一切が諸惡莫作の功德であり、全宇宙が一戒光明の光被する處となるのである。行者時に或は一念の不善を起し、一點の罪過を犯すことありとも、直ちに後念に反省の德が表はれ、懺悔の淨信が起りて、斷じて其の不善を相續し、戒體を失ふには至らぬものである。これ即ち信仰が吾等の生涯に於て、羅針盤と成り燈明臺と或り、大寶財と成り大妙藥と成り、大法雨となり大船筏と成るといふ所以である。道元禪師の御示しに、大凡信現成のところは佛果現成のところなりと。實に有難き法門である。道林禪師が白樂天に對するの答話も、この意味に於て、眞實佛法の大意であつたのであります。

七處世六法

序　彼岸は遠きに非ず

大乘佛敎の法に波羅密と云ふ原語がある。略して度と譯し、詳くは到彼岸と翻譯する。即ち人生の所有苦惱、暗黑、罪惡、煩悶等の荒波を渡り越えて、安樂、光明、清淨、平和の彼岸境に到着するの謂である、不完全なる現實界の此岸より完全なる理想の彼岸界に渡るの意である。然し乍ら誤解してはならぬ、人生を夢幻視し現世を土灰視して他方世界に向つて死後の樂土を憧憬するが佛敎の本旨では無いのである。大乘佛敎の本旨は何處までも人本主義である、即ち人生生活の上に於て直に佛陀の身心を體現し、吾々處世の上に於て佛陀の光明を遍照せしむるを要するのである。煩惱を斷ぜずして菩提を證すとか、娑婆即寂光淨土とか、修證不二の法門とか云ふ、何れも皆

同一意義を言ひ表はした文句である。

困ることには今の人の多くは、高遠なる理想と卑近なる現實とを全然別物扱ひにして理想と現實とは美醜の相反するもの、結局と經過とは苦樂の正反對なるものと考へ違ひして居ることである。故に彼等が日夕熱望する處のものは所謂「成功」の二字である。其も人としての成功即ち内外玲瓏たる人格の完成、德器の成就といふのでは無くして、財界とか官界とか亦は其他の階級に於ける目覺ましき一足飛の榮達の如き類をのみ目して成功家と云ふが多い樣である。が然し、斯かる考は處世上最も恐るべく厭ふべき思想である。何故なれば、斯る一足飛の成功家の如きは、十人が十人克ち得べき性質のものではなくして、百千人中稀に三五人あるに過ぎぬのであるから、斯る考への人は、投機的處世法、賭博的人生觀とでも云ふべきものである。其結局は、排他的行爲と成り、自暴自棄と成り、失意煩悶の谷底に落込の外は無いのである。

譬へば京都見物を思ひ立つた二人の旅客がある。東海道を歩み進んで往くに、甲は何でも早く京都に到着したい、一日も早く都の風景に接したいと、シヤニムニ前途を急ぐの餘り、途中に於る三國一の富士山も、田子浦や濱名湖の景色も更に眼に映らず、旅は憂いものつらいもの、行路難々の思ひに苦しみ、終ひに途中で病氣に掛つて了つた。乙は是とは反對で、眼指す京都も樂しみは樂しみなれど、急がぬ旅の心安さは悠々たるもの、三里で一休七里で一泊、沼津の宿には富士の白妙を賞し、興津の清見寺には禪林の閑寂を訪ひ、名古屋中京の繁華に驚き、關ヶ原古戰場の昔を偲びして、往く先々の行樂に旅の疲れも知らず〳〵、目的地の都に達したとする。人生の行旅に於て吾々は、此の二人の甲乙何れを選むべきか。

佛敎を奉ずる吾々の最高目的理想は、吾々各自が佛陀如來たるに在るのである。佛陀には自覺と覺他と覺行圓滿との三義がある。先づ自覺とは吾人自ら自己本來の價値資格を覺るのである、我に佛陀たる最高人格を具備して居るを覺るのである。只完成磨出の域に達せざるのみであるのである。吾々の智性は以て人生の眞義と世界の實相を

明らめ得るの本能あるを覺るべく、吾々の感情は以て一切衆生に對する同情慈悲愛憐の美德あるを覺るべく、吾々の意志は以て正義と理想とは相反する所の邪惡を斷盡するの力あることを覺るべし。此自覺あつてこそ吾々は其智をして眞ならしめ、其情をして美ならしめ、其意をして善ならしめ、其全人格をして向上せしめ得るのである。若しも此自覺なければ向上の途なき醉生夢死の生涯に終るの外は無いのである。次に覺他とは如何にして他の未だ覺めざる一切衆に對して此自覺を與ふべきかに就て最良最善の方法を發見することである。遠く俗間を離れ高く自身を標置しての獨善主義、自己本位を專らにするは、決して吾々の理想とする處では無い、如何にしてか一切衆生をして速かに無上道に入らしめ佛身を成就するを得せしめんかと、賢愚老幼男女の別を見、その相手方の機根に應じて其々に、自覺の途を指導するの働き、是を覺他と云ふ。前の自覺を根本智と稱し、次の覺他を後得智と云ふのである。扨第三の覺行圓滿とは、吾々人生と此世界とは、決して罪惡苦痛の充滿せる涙の谷でも無く、悲哀の森でも無い、此世界こそは吾々が自覺に基いて起す處の行爲を實行實現して、大覺世尊の聖法を圓滿完成せしむべき好個の理想鄉である、眞善美圓滿の極樂國土である。維摩經に「汝等佛土を得んと欲せば當に其心を淨むべし、其心の淨きに隨つて即ち佛土淨し」で、自覺せる人は即ち佛陀の嫡子で、覺他の行はるゝ處は即ち佛陀の鄉土であるのである。

扨此佛陀の行爲、即ち自覺覺他と云ふ高遠なる理想を實現すべく、世を渡り人に接するに就て、所謂目的と經過とを如何に適合一致せしむべきかと云ふに、爰に大乘佛敎徒の實踐修行すべき六波羅密と云ふ誠に尊き御法が有る。以下その六ケ條に付て詳細に說き明すこととせう。

第一　戒律

戒律とは非を防ぎ惡を止るを義と爲すと云つて、一定の箇條を列ね、人をして是に觸

れ是を犯さゝらしむる處の制裁法である。佛教中の戒律は其種類が澤山あることで、小乘戒とて箇人の修養を本位とする小範圍のものあり、大乘戒とて社會救濟を目的とする廣範圍のものあり、又は出家專門の戒律あり、在家男女の戒法あり、一時的の戒法あり、永久的の戒法あり、頗る面倒なる解釋もあるなれど、結局この戒律の根元基礎と云ふものは、吾々本來の人性上に具はつて居るものなので、吾に完全圓滿なる佛陀の本性實質あり、此本性實質を磨き出して人格完成の域に達する。これ人生の目的なりと云ふ、自覺あり確信あるの人は、即ち戒律の根元を手に入たる人である。一切衆生に佛性ありと雖も必ず持戒に因て後に現るとは涅槃經の佛說であり、衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る、位大覺に同うし畢る、眞にこれ諸佛の子なりとは梵網經に於る證明の御言葉である。受とは傳なり傳とはこれ覺なり即ち佛心を覺るを眞の持戒と名くとは、達磨大師の說明である。此の大自覺に基いて起す行爲は一切善であり、此大自覺に背いて起す行爲は一切惡である。又この本具の佛心を以て吾より長上に向ふ時は感謝報恩の觀念と成つて現はれ、吾より力劣れる弱き人に對する時は、慈悲愛憐の心と成つて現れ、更らに一切衆に對する時は其處に正義の觀念と成つて現れる。この正義慈悲報恩の三大觀念こそは、常住不斷に吾々が心靈の奥底に宿せる處の佛性の發現作用であるので、戒律の基礎も道德の根本も皆それ斯に存するのである。此戒律には、三戒、五戒、八戒、十戒、四十八戒、二百五十戒、三千威儀、八萬細行と、種々の區別名目も有ることなれども、今我が禪門に嫡々相傳し來れる戒律は、繁に過ぎず略に失せず、出家在家男女老少に通じて、廣く率持し得らるゝところの、佛祖正傳菩薩大戒と稱する十六ケ條の戒律である。十六ケ條が大體に於て三種に分れて居る。一に三歸戒、二に三聚淨戒、三に十重禁戒で合して十六ケ條と成る。先づ三歸戒とは、南無皈依佛、南無皈依法、南無皈依僧、を指す。南無は原語で皈依とはその譯語であり、叮寧に兩語を併稱するの慣例である。吾等は各自平等に靈妙圓滿なる佛性を具有することを自覺し、全身全力を擧げて此本具の佛陀に投合皈一し其靈德を發

輝することを勤むると同時に、吾等をして此確信を得しむべく甚深無上の宗教を開示し給へる、三千年前歴史上の現佛、大恩教主釋迦牟尼佛に皈依し、其亦釋尊の尊嚴慈光を永遠に久住護持しもて行く處の堂塔佛寺佛像佛體を尊重し、其靈力を讃美すると共に、無邊の空間無限の時間に於て一切衆生を愛愍攝聚し給ふ處の、三世十方の諸佛に歸依するものである。是が即ち南無皈依佛で、次に南無皈依法、法とは法則軌道の謂である。箇人生活には箇人生活の法則あり、人類社會には人類社會相互の法則あり、宇宙全體には宇宙全體の法則あつて、一絲も亂れず、一歩も曲ぐることの出來ぬものである。吾等は是等の法則を守りて常軌を逸せず、本具の佛性を開發し、人格を完成すべく、向上進展するに付ても、教祖釋尊の開示し給ひる教法を仰いで指南車と爲し日夜に信受奉行しもてゆくが皈依法である。次に南無皈依僧、僧とは一身を教法に委ねて自らも修行し、他にも教法を宣傳しゆく專門の宗教家を指す場合と、教主・教法、教徒を總合したる一大團體を總稱する場合とあるので、今は雙方を通じて、熱烈なる誠心を注ぎ、教祖の威光を汚すまじ、教法の衰頽を來すまじ、教徒の本分に背くまじ、教團に不利を及ぼすまじと、心身を盡しもてゆくが皈依僧である。要するに佛は平等の本體、法は萬差の軌則、僧は調和の妙用で、此三大原則に基きて行動するが三皈戒である。

三聚淨戒とは、有りと有ゆる衆善萬德を盡く聚め攝める清淨なる戒律と云ふ意で、一に攝律義戒は、理に背き道に合はぬ一切の惡と云ふ惡事は、決して作しませぬと云ふ消極的の戒律。二に攝善法戒は、理に順じ道に契ひる一切の善と云ふ善事は、必ず勤め行ひますと云ふ積極的の戒律。三に攝衆生戒とは、世を導き人を救ひ道を弘め教を助けるに足るべき一切の行爲は、必ず勤め勵みますといふ利他的の戒律。大凡人間社會に行はるゝ倫理道德政治法律、其他一切の宗教に於て且つ唱ひ且つ勤むる處のものも、結局この三聚淨戒の外に出るものは無いのである。吾々の實踐道德と云ふも修養の道と云ふも要はこの三聚淨戒の運用である。例せば朝寢好の者が翻然悟る處あ

つて朝寢の惡癖を止むるは第一攝律義戒で、早起して家業に勉强するは第二攝善法戒で、斯くて家族の者の鑑ともなり近隣の人への手本とも成るが第三攝衆生戒である。

次に、

十重禁戒は、何が重善で何が重惡かと云ふ大綱を擧げたもので、他の比較的輕い善惡に對し撰びたる重要の禁戒である。第一不殺生戒、人々具る常住佛性の作用たる慈悲心と報恩心とを體して生とし生ける物に對すれば、自づと博愛仁慈の行爲となる。殘忍酷薄、冷酷無情は即ち破戒である。吾々は先づ自己本來に持合せる佛陀を殺さぬ樣に心掛けるが不殺生戒である。第二不偸盜戒、凡そ原因結果の理法は、人生百般を一串せる眞理であるから、吾々の貧富苦樂の境遇も因果の理法を外にしては、到底何うする事も出來ぬものである。然るに是を一種の暴力を以て自分の都合が善い樣に何うかしようとするのが偸盜である、偸盜は因果の理法を晦ますと同時に、他人に損害迷惑を及ぼして常住佛性の慈悲心に背く、恩を受けて恩を忘るゝが如きは偸盜の大なるものと知らねばならぬ。第三不邪婬戒、承陽大師この戒を解釋して「心境如々にして解脫門開くるなり」とある。如々とは其通りの有の儘と云ふこと、男は男で其通り、女は女で其通り、處女は處女、妻女は妻女、寡婦は寡婦、夫は夫、父は父、萬人皆有のまゝで其通りに、其位置を守り其軌道に外れぬ、其處が大解脫大安樂の法門で、直に此不邪婬戒の當體である。若し是を犯せば自己本然の靈光を晦まし、他の身心を惱亂して慈悲心報恩心の佛性に反き、最高人格を汚損して畜生道にも墮落するに至るのちや。第四不妄語戒、凡そ宇宙間の一切に涉れる諸ろの法則は一定不變公明正大で毫釐も昧す事がならぬ。この公明正大の眞理に準じて、吾々の言語、行爲、思想を明々白々にし、一切有のまゝにして曲げず僞らず、欺かず飾らぬが此戒の當體である。殊に利の爲めに節を變へ、欲の爲に說を二三にするが如きは妄語の大なるもので、自覺覺他の大信仰を抱くが持戒の上乘なるものである。第五不酤酒戒、他人に酒を酤り酒を勸めて罪惡の門に誘ふてはならぬ。多くの場合に於て酒は諸惡不善の根本である、

吾々は常に慈悲心報恩心を體して衆人の自覺向上を助長して行かねばならぬ、自覺向上の障害となるべき物は成るべく取り棄てやらねばならぬ。是この戒の精神である。第六不説過戒、嫉妬心や偏執心を以て、同一佛法中の同一信者同一修行者、同一學徒同一門徒の誰彼の過失欠點をば、他の不信者異教徒に向つて吹聽し廻つては成らぬ。吾々は日常何に附ても教の流通し法の盛大ならんことを心掛け、同信同教徒の過失は勤めて是を外聞に漏れぬ樣にと注意するのが法に親切なる所以である。第七不自讃毀他戒、高傲我慢の心、名譽利達の念に驅られて、自己の德を讃め歎し、反對に他人の過失を毀り他人を陷いれ、損害苦惱を與へてはならぬ。宇宙一枚法界平等の理を觀じて見よ、我他彼此の迷執は除るで有らう。一切衆生同一佛法の理を覺つて見よ、讃むべき自分が何處にあるか、毀るべき他人が何處に在るか。慈悲心と報恩心とを體して務めて柔輭の語、謙遜の語、慈愛に充てる語を以て、利他讃善の途に出るが此戒の功德である。第八不慳法財戒、無形の精神上の法寶でも、有形物質上の財寶でも、世のため人のために成り、道のため教のために成ることなら、慳まずに施し與へ、諸般の施設經營もみなこの方針で遣つて往けと云ふ戒である。大菩薩は衆生濟度の爲には身命をだに慳まず施し棄られしことである。我々の智識や財産、時間勞力、同じく費すならば、一小箇人我の刹那的欲望の爲に費すよりも、一切衆生の濟度と云ふ大事業の爲に費すべきである。いかに慳むとも惜み果すべくもなく終には、路傍の土と化すべき我々の生命、むしろ佛陀の爲に献げ一切衆生の爲に施して永遠の生命と化すべきである。第九不瞋恚戒『怒といふ突發せる一時の感情に支配されて、心の平衡を失ひ、理性の働を欠てはならぬ、法界平等の理を觀ずれば、怒るべき相手が無くなる。大慈悲の親心を體すれば、一切衆生が可愛き赤子である、友愛親交の德を以て汝に敵する者をも感化すべきである。此戒を持てば、一切の爭ひ訟へを離れて、心は常に安穩に身は即ち平和、一家和樂し衆人悅び交はり、博愛仁慈の佛德を發揚して、君子大人の人格を完うするに至るのである。第十不謗三寶戒、吾々は日常の言語や行爲に於て、

佛陀の德を讃し、教法の光の輝く、僧團の信を增すべく努めねばならぬ。然るに教主教典教團の內容を誹謗し、其尊嚴を汚すやうの言動に出るのは、これ獅子身中の虫である。更らに又、教徒信徒として有るまじき非法不德の行爲をなすは、これ身を以て三寶を謗るに當り、內に甚信の信念を缺き、外に敬虔の儀禮を缺くはこれ心を以て三寶を謗るに當るのである。自分を初めとして他の一切衆も皆共に同一佛性を具有することを信じ、自ら自己の人格を尊重すると同時に、他の人格をも尊重して、其靈性を汚さゞるこそ、眞の此戒の護持者である。

以上十六條の戒律を略說したのであるが、吾々處世要道の一として、此戒法に依て一身を律し、行住坐臥、公務私交、總じて規律正しき生活が肝心である。

第二　布施

處世要道の第二としては、布施である。布施と云ふて僧に供するのみで無い、施すと云ふて貧者に與ふるのみで無い。今日の所謂、社會改良事業も、慈善救濟事業も、感化教育事業も、其他國家の政治も地方の自治も、何一つとして廣き意味に於る布施法で無いものは無いのである。其ばかりで無い、この天地間の一切萬事が皆布施の道理に依つて支配されつゝある。見よ太陽は光と熱とを施し、大地は濕氣と地溫とを施し是に依つて草木繁茂するのである。動物と植物とが呼吸を施し合ふて空氣を新鮮にし、縱の柱と橫の棟とが互ひに力を施し合つて家屋が安全であり、男の力と女の力とが施し合つて一家繁榮する等、何事でも施しの道理に依つて成立て居る。施しを嫌ふものは破壞主義と成る。この布施と云ふ言葉を梵語では檀那と云ふ、大なる施を爲す人が大檀那樣である。施し嫌ひの利己主義者は、何程の財產が有つても檀那樣とは云へぬ事である。大凡人類分布の跡を尋ね、生物進化の理を究めて、四海同胞、生命一體の道理が解れば、博愛同情の念が油然として起るであらう。三世因果輪廻轉生の佛說を信ぜば、一切男子は是我が父、一切女人は是我が母てふ感が强められ、利他布施の願

行が實踐さるゝのである。

布施の種類に大體三通りある。一には金錢物品の類を施し與へて、貧しきもの病めるもの、孤兒棄兒、癈疾不具のものを救ひ助くることである。二には自分の持合せる學力なり智力なり、權力腕力其他一切の力を施して、直接間接に世を救ひ人を助くることに助力することである。承陽大師の御示しに、自ら用ゆるも布施の一分なり、父母妻子に與ふるも布施なるべし、とあり又、船を置き橋を渡すも布施の檀度なり、治生産業もとより布施に非ることなし、とある。慈悲の念に住し、利他の精神で爲る事なら、吾々の日常の業務も皆布施の道理に準ずるのである。世に一類の人あり云ふ、自分には餘分の財産も力も無いから、思ひ乍ら施しが出來ぬと。是に就て優婆塞戒經に尊き佛說がある。「財なき人施す能はずと云ふは實に非ず、貧しき人、食器の洗ひ汁を施すも慈善なり、一塊の麵塵を以て蟻に施すも亦廣大の功德なり、極めて貧しき人なりとも其身の無きはあらざるべし、其身を以て他人の善を作すを助けよ、他人の善を作すを見て隨喜讃歎せよ、これ自ら施す所の功德と異ることなし」とある是が布施の眞精神である。爰に注意せねばならぬことは、金錢なり何物なり施し惠むに當つては、只一時限り相手方を喜ばし、其欲望を滿足せしめるよりも、むしろ一時の欲望を充さずとも、永久的に其人をして眞箇獨立自主的の幸福を得しむることに向つて考慮すべきことである。施し與ふるの結果、相手方をして獨立自主の精神を失はして、依賴心や遊惰心を助長せしむる樣のことは、避ねばならぬ。扨第三の布施は、勸善止惡の道を說き、安心解脫の法を示し、自覺覺他の彼岸に導く所の、精神的救濟即ち佛陀の敎法を施すことで、是ぞ所有施しの中の最上乘の布施であえので、釋尊も法施の功德は無量にして窮むべからずと說き給ふてある。實にも世に眞實佛陀の正法が弘宣流布され、人々みな佛法に依て其心を治め其身を律するに至らば、國政も善く治まり、國富も益々增進し、其こそ地上に天上界を建設する事が出來るで有らう。眞に國家を憂ひ人類を愛するの士君子は、須らく佛陀正法の興隆に向つて、銘々持合せる力を施

し合ふべきである。

常に慈悲の佛心に住し、布施仁愛を事とするものには、無量廣大の功德あることが、諸經論に說かれてある。今その中の一二の功德を擧げて說き明して見やう。一には卑しき肉的慾情が次第に薄らぎ、狹き利己的私欲が減じて來る。二には何事にも奮發心が生じて、學問でも經濟でも豊富に成る。三には罪惡を犯す機會が少く成り、善事善行が容易く出來る。四には怒り易き短氣が輕くなり、寬大の度量を增して來る。五には常に喜悅法樂の情に充ちて、不平不滿を忘れて終ふ。六には衆人の信賴する處と成り、萬人の依估と成りて大人の德を完うす。七には過去の罪惡も消滅し去つて、禍轉じて福となる。八には諸佛諸神が幽冥の中に守護し玉ふ故に、寢ても寤ても身心安穩である。九には日常生活が其まゝに、自覺々他の佛作佛行なりと觀じて、理想的生涯が送らるゝ。十には生々世々を盡して佛果菩提を圓成する。先づザット此通りである。

第三　忍辱

六波羅密の第三が忍辱なり。忍辱とは辱めを忍ぶと云ふことで、耐へ難き侮辱屈辱を加へられても、能く忍びて怒り應せぬことである。惡罵の毒をも忍受して甘露を飲むが如くするを、有力の大人と名け、入道智惠の人と稱するとは、遺敎經の佛說である。この忍の反對が瞋恚忿怒の情にて、一念瞋恚の焰は無量の功德聖財を燒却すとは、大集經の所說である。お互が親心を以てすれば、何の樣な小供の我儘をも耐へ忍び得るもの、佛心と云ふお慈悲を體すれば、何の樣な一切衆生の迫害をも忍び得るに耐ゆるで有らう。昔時支那の禹王は、城中を御巡幸なされて、一獄舍に到られ、罪人を見て泣て其手を取て、謝して曰く、汝をして此苦を受けしむるに至れるは、偏に朕が不德の致すところ、乞ふ是を恕せと。此心を以て國を治め給ひし爲め、終には國に罪囚の影だに無きに至つたと云ふ。此心を以て一家を統ぶれば家內和合し、此心を以て隣人

に交れば、一鄉平和に、此心を以て國を治むれば天下平になる。忍の德たること、持戒苦行も及ぶこと能はざる所なりと、遺敎經に說き玉へるは、眞實である。

攝大乘論の中に、五義を觀察することに依て、瞋恚を滅し忍辱を守るを得ると說てある。一には一切衆生は生々世々の永劫に於て我に大恩ありと觀ず。二には怒る心も罵る心も念起念滅して定めなき假りの姿で、實體なきものと觀ず。三には怒る人も罵る人も四大和合の假の身にして、實體實物なきものと觀ずる。四には一切衆生は自ら重き苦痛を受けつゝあるもの、云何ぞ復是に加ふるに怒りの苦惱を以てせんやと觀ず。五には一切衆生を看ること皆吾が子なりとすべきに、如何にして損害を與ふることをせんやと觀せよとである。實に斯く觀じ來れば、怒の心も消散るで有らう。

扨、忍辱の修行には、此の怒らぬと云ふことの外に、まだ種々の忍耐法がある。即ち次には、所有る困苦難難欠亡を耐へ忍びて、克く是に打ち勝つて行く忍耐である。憂きことのまだ此上につもれかし、棄し我身のほどを試さん、の歌の如く、如何なる逆境にも耐へ忍ぶ處の强大なる意志の力を持ねばならぬ。木下藤吉郎も此忍耐に依て、大閤秀吉とは成つた、二宮尊德も此力に依つて大人物と成た、末つひに海となるべき河水も、しばし木の葉の下くゞるなり、の歌を味ふべきである。其次には、自己の情欲を忍び耐へ、目前の物欲に打ち勝つ所の修行が必要である。總べて小利を忍ばねば大利ほ得られぬ、小欲を犧牲にして始めて大理想を實現するに至るのである。吾々には五欲といふ日常の情欲がある。一は財寶の慾、二は戀情色慾、三は飲食の慾、四は名譽の慾、五は安逸の慾で、是に溺れ是に耽れば、修道の妨となるばかりでなく、遂に身を亡ぼし、世を毒するに至る。故に務めて此等の慾情を忍び堪へて、自覺覺他と云ふ大理想の實現を期すべきである。

要するに、無我平等の理を悟り、本具佛性の慈悲心を體して、忍辱柔和の德を養ひ、友愛親切の交りを結ぶが處世の要道であるので、克己、謙讓、感恩、寬裕、等の德が附隨して來るであらう。

精進とは、精神を込めて進むと云ふ字で、唯識論には、精進は勇敢を以て義と爲す、と說いてある。即ち勇猛の精神、敢爲の氣性を以て、何處までも善に向つて進むことである。世俗が祖先の命日等に、魚肉を喰ぬことを精進と云ふのとは、少しく意味が違ふ。最も是も精進の一部には相違ない、何となれば、間接に殺生を避け情慾を抑制するの功驗があるからである。遺敎經に、汝等勤めて精進すべし、譬ば少水の常に流れて、即ち能く石を穿つが如しとある。水車みづのからくり自らも精進の反對が懈怠放逸である。菩薩本行經に、夫れ懈怠は諸行の累なり、世間的には、產業興らず衣食供らず、出世間的には、轉迷開悟の道に達するを得ずとある。觀よ天地萬物何れも精進の姿ならぬは無い。星辰の運行、流水開花、晝夜を措ずして進み通しでは無いか小野道風は此精進の功に依つて、書道の大家と成り、三井岩崎は此功に依て長者と成つた。彼の法華經八卷を始め、澤山の經論を翻譯したる鳩摩羅什尊者は、支那傳道を志したのが六十三歲、流沙河の危きを凌ぎ雪山の嶮を越えて、途中三年の月日を費し、支那に來つて支那文學を研究すること十五ヶ年の後に、初めて敎典翻譯に着手し二十ヶ年間にして、能く五十餘部の譯經を完成された。又かの達磨大師が萬里の波濤を侵して支那に渡られたのは、實に百三十歲の時で在らせられた。其勇猛の氣、精進の行、何うであらう。釋尊が因位の御修行は最初御發心の曉より、五百塵點劫の間、娑婆往來八千返の精進力と一承はる。實に廣大無邊の大精進力と仰ぐの外は無いのである。

扨、如何にせば此大精進力を奮起せしむることが出來るかと云ふに、吾は本來佛性あり、佛陀の嫡子なりと云ふ大自覺心と、大慈悲救濟の利他心を持ち、且つは世の無常を觀じ、我身の夢幻なるを察するにあるのである。世の中の無常なることは流るゝ水の如しと觀ずれば、一寸の光陰をも等閑にせずに、修養する心が起る。我身の無常な

ること、草露の如しと觀ずれば、卑しき物慾に囚はれずして、修行する心が起る。精進發展の基は、實にこの無常觀を以て出發點とするのである。承陽大師の御垂示に、

「徒らに塵土に化して人に厭はれん髑髏をもて、よく幸ひに佛の正法を行持すべし、寒苦をおづること勿れ、寒苦いまだ人をやぶらず、寒苦いまだ道をやぶらず、たゞ不修をおづべし、不修それ道をやぶる人をやぶる」と云が眼藏の中に記されてある。

釋尊本生譚中に、昔時雪山童子と成つて、勇猛精進に御修養中、帝釋天王が童子の修行を試み、且つ是を激勵せんがため、一日深山中に在つて高聲に「諸行無常、是生滅法、の二句を唱へた。坐禪冥想中の雪山童子は忽ち其聲を聞き附て、扨も尊き偈文である、然るにしても其續きの偈文が有るに相違ない、ソモ彼の偈を唱へられし御方は何人なるか、是非共尋ね求めて殘りの偈文を聞き度しと、聲する方に耳を澄せば、ヤヽ有つて亦も最初の偈文が聞ゆる。其聲を便りにして次第々々に深山の奥へ尋ね往くに、行け共〳〵其人の影だに見えず、唯々最初の半偈のみが遙か遠方に響ゆるのみ。

往くこと終日にして漸やくに、唱ふる人のソレらしき姿が谷底遙かに發見されぬ。雪山童子は欣喜雀躍の餘り、疲勞も忘れて一散に走り近づき見れば、面貌恐ろしき羅刹の姿。雪山童子は懇ろに、尊き偈文を唱へられしは御身なるか、願はくば殘る半偈をも續け唱へ聞かしめ玉へ。羅刹は點頭て、如何にも彼の偈文を唱へしは吾身なり、彼の偈文こそは、過去歴代諸佛より相傳の尊き偈文なり、然れど吾身は即今空腹に耐へ兼て、殘る半偈を唱るの氣力なし、童子若し强て聞きたくば、我が空腹を充すべく、何なりとも食物を與へられよ、然れど生ける動物の肉ならでは我食に充つるものなしと。雪山童子は時に大勇猛精進の犧牲的精神を奮ひ起して、此の尊き一偈を聞いて自己の轉迷開悟を資くると同時に、他の多くの人々の悟りをも助けんと決心して、羅刹に對し一箇の約束を結むだのである。ソハ殘る偈文をも全部唱ひ聞かせ了らば、直ちに傍らの岩面上に是を刻み付け、其報酬として我肉體を施て羅刹の餓を救はんと云ふのである。時に羅刹は高聲に、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂、と四句の

偈文を唱へて聞かした。童子は聞き了つて心地頓に開明し悟達に達した。依て羅刹の持てる弓の簇を借り受けて、偈文を岩壁に刻み付け、斯くして置きなは、何時かは何人かに依て發見され、世間に聖道の傳る時節も有らむと心に悅び、約束に從ひイザとばかりに身を投げて羅刹の口腹に埋られんとせしに、此時羅刹は忽然と身を藏くし、元の帝釋天王の姿を現じて、諸天善神と共に天華を雨らして、雪山童子が勇猛精進力を讃歎隨喜して去つたと。釋尊因位御修行中の譚りで有る。

第五　靜　慮

靜慮とは、靜かに慮かると云ふので、梵語で禪那と云ふ。寂靜と心を寂め、深慮と徹底した考へを持つて、意が散亂せず、亦沈欝せざるを以て義と爲すのである。この靜かに慮ると云ふには、立つて居てもいかず、臥て居てもいかぬ、必ず正身端坐で無ければいかぬ。坐禪と云ふ法が傳はつて居る所以である。何事でも靜慮でなくては成功

せぬ、深遠なる學理の研究も靜慮に依る、巧妙なる機械の發明も靜慮に依る、品性の修養も靜慮に依るのである。是に反して人間の墮落や失敗は靜慮を缺くの結果に出づるのである。

靜かに慮るには、前に云ふ通り正身端坐の坐禪法に依るが善い。其法は、我が禪門に正傳し來つて居るのである。坐禪には先づ三調と云うて、身を調ひ呼吸を調ひ意を調へねばならぬ。即ち食事と睡眠と被服とが各過不足無き樣に調へ、靜かなる一室を選みて結跏趺坐と云ふ坐法を調へる。結跏趺坐とは、臀部の下にだけ一枚の坐布團を敷きて一段高くし其上に腰を下し、右足を曲げて左の趺の上に置き、左足を曲げて右の趺の上に置くを正式の結跏趺坐と云ひ、只に左足を曲げて右足の上に置くのを半跏趺坐と云つて略式である。或は亦時々左右を上下に轉換して足の痛まぬ樣にするのも任意である。次には右の手を左足上に安じ、左手を右手上に安じ、兩手の親指が向ひ合つて支ふ樣にする。脊骨を直く竪てゝ耳は肩に對する樣、鼻は臍に對する樣に眞直に

する。口を閉ぢ齒を結び、眼は張らず閉さず正眼に開いて鼻端を見る氣持に成る。肩を張らず胸を張らず、下腹に氣力を込る。以上で大體に身體が調ふ。次に調息法は、欠氣一息とて、大に口を張り永く息を呼くこと一兩息の後、麤より細に入つて鼻にて呼吸をする。但し深く氣海丹田と云ふて臍の下から氣息を通ずる樣にするが肝要である。次には調心法であるが、調ひ難きは吾々の心である。心は所謂コロコロであつて、動轉浮流して定めなく、心猿飛び移る五欲の枝、意馬馳走す六塵の境と云ふ通りである。故に此の心を調ふたに就ては、禪に於て種々の對症療法的の觀念法が傳へられてある。譬へば情欲に心を亂さるゝ者には不淨觀と云ふがある、一人の美婦人を假想する、其美人が病に侵されて容貌が衰ふる、大小便に身體が汚れる、醜惡なる姿と成て落命する、腐敗して惡臭が身に迫る、無數の蛆がわく、野犬や狼が來て爭ひ喰ふ、一片の枯骨のみ殘る。と云ふ樣に次第に觀念して前の情欲を退治するのである。亦虛榮心を退治するには無常觀があり、我慢心を退治するには無我觀があり、不平心を退治するには慈悲觀、因緣觀があり、暗昧愚痴心を退治するには佛身觀、念佛觀が有る等の類である。然し是等はみな一時的の枝葉の禪觀であるので、是等の分際だけでは、安住不動の境界、八風吹けども動せず天邊の月と云ふ靜慮は得られぬ。眞實に徹底した調心法を修行せんと欲するの人は、是非共この道の堂奥に達するの明師宗匠に就て實參實究すべきである。文字書籍の上に就て獨學的に研究すると云ふ樣なることは、禪學に於ては絕對不可能のことである。先々から代々の明師家に就て印可證明を得來れる處の宗匠に參じて、その親授口訣を受け、指導を受けつゝ坐禪功夫するが肝要である。近來の書いたものゝ中に、曹洞禪は何うの、臨濟禪は何うの、公案調べの階子禪であるの、默照の盲目禪であるのと、未だ足の實地に到らぬ人達まで、色々と批評することが多い樣であるが、決して是等の說に迷ふてはならぬ。人根に利鈍あり道に南北の祖無しである。機類に應じて爲人の活手段を弄するのが、宗師家分上の策略であるから、何でも因緣のある師家に就て、親參實究するが善いのである。釋尊の御修

行を始めとして、三世諸佛、歴代祖師、何れも坐禪に依つて成道大悟せられたのであるから、實に佛法の總府・教義の淵源と云ふべき、修養の根本法なのであつて、決して一宗一派の名を以て目すべきで無い。利人鈍者を問はず、有學無學を論せず、何人にても此門に入つて熱心修行を續くるに於ては、必ず自心の眞面目を明らめ、大道の所在を明らめ、宇宙の玄奥を究め、天人合一の究極的安心の地に達し得らるゝので、修養の基礎も、宗教の根柢も、皆この坐禪靜慮の一法に存するのである。

第六　智　惠

處世上に於て、智を研き學を修め、見聞を廣め觀察力を深くして往かねばならぬことは云ふまでも無い、其には常に讀書聽講、實習功夫を怠つてはならぬ。學校には卒業と云ふことが有るけれども、學問には卒業期限が無いのだから、人間は死ぬまで學ぶ覺悟が肝要である。一度祖當の地位を得、多少の成功を贏ち得たのに滿足して、學究を怠れば暫時にして世の進歩に後れ、忽ちにして人生の落伍者と成らねばならぬ。然しながら是等は平凡の小智惠と云ふもので、誠に微弱なるもの、到底生死大海の荒波を渡り、安心解脱の彼岸に達することは叶はぬのである。六波羅蜜中の第六に當る此智惠は、般若の大智惠と云ふて、佛心の發動たる靈智靈力の作用を指すのである。世間上の智惠智識は、元來不完全なる人間五官に觸れる所の限りある經驗を基とせるもので、云何なる智識學理も、蓋然の眞理と云ふて、暫定的智惠たるに過ぎぬのであるから、人は到底科學哲學のみを以て滿足し安心するわけには往かぬのである。宗教的智惠、自覺的靈知の必要を感ずる所以は斯にあるのである。

釋尊が大覺成道後の最初の獅子吼に、「奇なる哉、一切衆生は悉く如來の智惠と德相とを具有す、只妄想執着あるを以ての故に證得する能はず」と。然れば吾等は一心に、懺悔歸佛の信念に依つて、重なる妄想執着の浮雲を拂ひ除き、前來説き明し來れる六波羅蜜の妙行を修行して、本有常住の眞如の月を看るべきである。愚痴迷妄の黑暗界

は直ちに消え去つて、光明ある生涯に入るで有らう。是をこそ入道智恵の人と云ふのである學問や智識の有無には關せぬのである。此に反して、何程の智恵學問があり諸子百科の學術を修めたと云ふ人でも、吾に諸佛同體の大人格を具することを信ぜず、佛陀無限の大慈悲を信ぜず、善惡因果の理法を信ぜず、三世相續の無限なることを信ぜず、佛性顯現の大理想なく、衆生濟度の大慈悲なく、安心立命の大希望なき人は、是を愚痴暗昧なる可憐の衆生と云ふべきものである。

釋尊より第廿七代の祖師たる般若多羅尊者、東印度の國王堅固王の歸依を受けて居られた。一日尊者、王の招きに應じて參内し、王と群臣との爲めに說法せられた。王は非常に悅びて、布施として珍らしき一箇の寶玉を捧げられた。時に座右に三人の王子が居合せた。尊者は三王子の智を試みんとて、即ち其寶玉を三王子に示し且つ問ひ玉ふ。是は今日父王より頂きし物であるが、何と世に是と並ぶべき珍寶が他に有るか何うかと。長子と次子とは共に答へて曰ふ。否々是は天下逸品の大寶玉で、多年我が父君の珍藏し給へる國寶である、尊者の德あるに依て特に父君が布施せられたのであると。然るに第三子其時十一歳なるが、進んで答ふるには、否々是はこれ世寶たるに止まる、諸寶の中に心寶こそ最第一なれ、是はこれ世光のみ、諸光中に於て、智光こそ最勝なれ、是はこれ世明のみ、諸明の中に於て、靈明こそ第一なりと云ひ切つた。尊者も父王も此の答には一驚を喫した。この第三子こそは、後にこの般若多羅尊者に投じて出家修道し、第廿八祖菩提達磨大師と成られし神童であつた。

以上で處世之要道、戒律、布施、忍辱、精進、禪那、智恵の六波羅密の略解を畢つたことである。藥の能書を讀だのみでは何の詮も無い、服んで始めて病氣が治る。願くば此の靈妙不可思議の功能ある、諸佛秘法の六神丸を、日夕持藥として服用し、心身健固の處世をせられ度きものであります。

八　我等のつとめ

一　安心の三法門

佛法八萬四千の法門と申して、各宗各派の說くところは區々別々で、何れが佛陀の本旨やら、一寸その判斷に苦しむ樣な譯だが、理論的解釋の方面は別として、安心立命を得る實際的問題としては、結局三つの法門を出でぬことである。即ち其一は、坐禪觀法の力に依て見性悟道するか、其二は懺悔受戒の功德に依て、佛陀の子と成るか、其三は念佛稱名の力に依って佛の救ひにあづかるか、要するにこの三つの法門を外にしては、佛敎の入信は得られないわけである。古來この法門の上に於て、自力他力の別を立て、難行易行の違ひを說が如きは、畢竟しては無意味の戲論である。何故なれば、自他能所の別を離れて、唯一絕待の信仰に達するのが、佛法の安心であるので、自他凡聖の區別を認めるのを、凡夫の迷見とするからである。自我を離るゝといふ佛

法の本旨からは、坐禪悟道も懺悔受戒も、決して自力の法門では無い。現に曹洞宗祖道元禪師の御示たる、學道用心章中に、「行者、自身の爲に佛法を修すと念ずべからず。但佛法の爲に佛法を修する、乃ちこれ道なり」と亦「唯しばらく吾我を忘れて潛かに修する、乃ち菩提心の親しきなり」と示されてあり、更に實際の參禪修行上に於ては、身心を放下し自他を脫落するを以て用心としてあり。一に佛祖の眞訣を受けて、私の用心を加へざるべきを以て本旨として有る。亦受戒入位の方から云ふても、修證義の受戒人位章には「この歸依佛法僧の功德、必ず感應道交する時、成就するなり」と。感應道交とは、我と佛との相待を絕して、無二一體なる狀態を指すのである。故に禪門を自力の法門と云ふは、決して當つて居らん判斷である。一方に願阿彌陀佛の信仰をば、他力の法門と云ふが、至心に信樂し一心に歸命せねば救はれぬ。その一心に歸ト するものは誰だ、ト云へば、否やその信心も全く、自分自身で起すのでは無く、如來樣から頂かして貰ふのだと云ふ。ソンナラ、その頂かして貰ふいであると信